

近現代日本のアジア主義に関する一考察 ——征韓論から東アジア地域主義まで (二・完)

高 埜 健

目 次

はじめに

1. アジア主義とは何か
 2. 自由民権運動とアジア主義
 3. 国権主義・対外進出とアジア主義
 4. コスモポリタン型アジア主義
(以上、前号)
 5. 滔天と孫文
 6. 現代アジア主義へのインプリケーション
- おわりに——新たな「アジア主義」を模索して
- 参考文献・資料一覧
(以上、今号)

本稿前編(『アドミニストレーション』第24巻1号、2017年、15～39ページ)では、明治の征韓論に始まる日本のアジア主義の潮流をいくつかの類型に分けて考察した。その中で、19世紀末、熊本は荒尾出身の白浪庵滔天こと宮崎寅蔵(虎蔵¹)が、日本に亡命していた孫文(孫逸仙／孫中山)と出会って中国革命運動に参加する前までの状況を大まかにまとめた。前号から足掛け3年も掛かってしまったが後編となる本稿においては、概ね20世紀初頭までの滔天と孫文の交流を中心に論じる。本号の締め括りには、現代のアジア主義ともいえる「東アジア地域主義」について考察するとともに、戦前・戦中のアジア主義から学ぶべき教訓を、この21世紀における地域主義の発展に生かすことができるのか、また、行かせるとすれば、どう生かすべきなのかという提言を試みたい。

5. 滔天と孫文

¹ 戸籍上は虎蔵であるが、本人は好んで「寅」の字を使ったようである。

宮崎滔天という人物に関して本稿前編の書き出しに倣うならば、「アジア主義」全般に関する言説と同様に、当然またその文脈において、静かな、しかし根強いブームがあるといつてよさそうだ。言い換えれば、「コンテンツとしての滔天」は、時代を越えて繰り返し、手を変え品を変えて立ち現われてくる。そんな彼は、果たして単なる時代の徒花、もしくは近代日本を彷徨い続ける亡霊なのか。それとも、書評ブログで有名な松岡正剛がいうように、「これからの日本にこそ必要な男」²として求められているのだろうか。松岡がそう記したブログのエントリーは2006年12月30日付、今から14年も前の話である。しかし、たしかにその2000年代初頭にも滔天に関する書籍は、細々とではあるが出版されている。

たとえば、全6巻に及ぶ『宮崎兄弟伝』(刊行1984～2004年)の作者上村希美雄が滔天だけの伝記を1冊にまとめた『龍のごとく』を出したのが2001年、翌2002年には田所竹彦が『革命家と浪人』を出版した。この、宮崎家(孫の^{あき}露^き冬)が所蔵していた滔天と孫文の直筆の筆談記録や、滔天、孫文をはじめ日中の著名人たち(犬養毅、頭山満、魯迅、蒋介石、そして毛沢東までも)が残っていた揮毫や手紙などの文書類を集めた写真集に解説を付けたB5版ハードカバーの本の、どこにそんな需要があったのかと驚かされる。さらに、(それから約10年を経過した)近年においても、榎本泰子『宮崎滔天——万国共和の極楽をこの世に』(2013年)、加藤直樹『謀叛の児——宮崎滔天の「世界革命」』(2017年)、山本博昭『宮崎滔天伝——人生これ一場の夢』(2018年)などが出版されている。戦後も長きにわたって、滔天に対する一定以上の注目があるため、それが彼を題材にする書籍出版に対する一定の需要を生み出しているとみるべきであろう³。

滔天論の系譜

戦後の早い時期に出た滔天関連の著作といえば、たとえば、二・二六事件を描いた『叛乱』で1953年に直木賞を受賞した立野信之(1903-1971)が1966年に出した『茫々の記』がある。滔天と孫文の交友を題材にしたノンフィクションである。60年代後半ということでは衛藤瀋吉(1923-2007)も67年9月の『東京大学新聞』に滔天の『支那革命軍談』(西田勝編・解説、1967年法政大学出版局刊)の書評(「惹き込む明治の世界」)を書き、また『思想』(岩波書店)1968年3月号に「滔天と清国革命はどうして結びついたか」という文章を寄せている⁴。1963年に竹内好が『現代日本思想体系』全集で「アジア主義」(第9巻)の編集を担当し、戦後18年を経て漸く「アジア主義」を(日本思想の一体系として)復権させたことも手伝って、1960年代半ばには滔天を題材にした上記のような作品が世に問われたということになるだろう⁵。併せて述べれば、1967年

² ブログ「松岡正剛の千夜千冊」第1168夜「宮崎滔天 三十三年の夢」(2006年12月30日)
<https://1000ya.isis.ne.jp/1168.html> (筆者最終参照日2019年8月29日)

³ 以上およびその他の書籍について詳しくは、本稿文末の参考・引用文献一覧を参照のこと。付け加えると、『三十三年の夢』は東洋文庫版[宮崎1967]、全集版第1巻[宮崎1971]、岩波文庫版[宮崎1993]などがあるにも拘らず、この間、1982年に平凡社の「日本人の自伝」シリーズの第11巻に収録され、1998年に日本図書センターから「人間の記録」シリーズの1冊として、また2005年には新学社から「近代浪漫派文庫」シリーズの1冊として出版されている。

⁴ 衛藤瀋吉の文章は、いずれも[衛藤2003b: 73-118]に収録。筆者もそれを参照した。

⁵ それ以前に出ていた滔天に関する研究あるいは評論として、寺広映雄「中国革命に於ける中日交渉の一考察——宮崎滔天を中心にして」『ヒストリア』柳原書店、1954年8月、大野二郎「大陸浪人

に上記、衛藤が書評を書いた『支那革命軍談』（および「狂人譚」⁶）のいわば覆刻版が出版されていること自体が誠に興味深い。

1970年代から80年代に入ると、滔天関連本の出版の流れはさらに加速する。直木賞作家にもう一人いた。『聖少女』で1967年に受賞した三好徹（1931～）である。1978年から79年にかけて『歴史と人物』に連載し、79年11月に単行本として刊行したのが『革命浪人——滔天と孫文』である。やや前後するが、後に『逝きし世の面影』（1998年）を著す渡辺京二（1930～）が、1976年に『評伝宮崎滔天』を出版する。初版のあとがきにあるように、渡辺は「ほかにれっきとした研究家がいる」と一度は断り、「書くことなど、およそ夢想もしたことがなかった」評伝を、編集者から「滔天を書くのにもっともふさわしい人物」だと説得され、書くことになったという。渡辺は、滔天を「なみなみならず鋭い反省的な知性と、過激な魂の衝動のもちぬし」であると評し、（彼を知るにつれて）従来持っていた「人の好い義侠的人物」という「見かたが一変」したと述べている⁷。かくして渡辺は「本邦最初の滔天伝の筆者とな」⁸ったのである。

滔天の伝記を渡辺より早くから書き始めていたのは、渡辺が「れっきとした研究家」と呼んだ上村希美雄（1929-2002）その人である。上村は渡辺が主宰していた季刊誌『暗河（くらごう）』の創刊号（1973年秋）から「宮崎兄弟伝」の連載を始めていた。その連載は、同誌が資金難その他の理由によっていったん休刊となる1980年9月の第27号の後、自主刊行となってからも続いたようだが、ついに1984年、『宮崎兄弟伝』日本篇上下巻として刊行される⁹。『兄弟伝』という名の通り、同書は滔天のみならず兄の八郎、民蔵、彌蔵らの生涯とその軌跡を描いている。上村は元来熊本の郷土史家（であり図書館司書）であったが、この業績が評価され、後に熊本学園大学教授を務めた。熊本出身の父利夫（1883-1953）を持つ衛藤藩吉は、1986年に書いた自らの滔天小伝の締め括りにおいて上村を評して曰く、「考証といい、人をたずねての聞き書きといい至らざるはなく、森鷗外晩年の諸伝記をも凌ぐものがある」、「滔天のモッコスぶりに匹敵する」と独特の表現で高く評価した¹⁰。衛藤はそもそも滔天を「肥後モッコスの純粹主義をもって、アジア解放、四民平等の夢を追い続けた稀有の珍品」と形容していた¹¹。

『兄弟伝』以降、滔天を論ずる上で上村の仕事を避けて通ることはできなくなったのはたしか

の原型——宮崎滔天』『思想の科学』第9号、1962年12月、などがあるようだが、いずれも筆者は未見である。〔衛藤 2003b : 91, 93〕を参照。

⁶ オリジナルは『二六新聞』（二六新報）の連載ものであった（1901＝明治34年6月19日～10月13日まで68回）。詳しくは〔宮崎（西田編・解説）1967 : 229〕を参照。併せて注24も参照のこと。

⁷ 〔渡辺 2006 : 367〕。この点、衛藤藩吉が滔天を「逡巡するハムレット型というよりただいちずに行動するドン・キホーテ型〔衛藤 2003b : 75, 88〕と評したのとは異なった見方だといえよう。

⁸ 〔渡辺 2006 : 369〕。

⁹ 〔上村 1984a, 1984b〕。なお、『暗河』第27号の時点で「兄弟伝」の連載は第四部（「犬養木堂」に始まる、すなわち単行本では「アジア篇（上）」）が開始されたところであった。その後、同誌が自主刊行になってから、筆者（高埜）は追跡していないことをお断りしておく。

¹⁰ 〔衛藤 2003b : 112-113〕。初出は山崎正和編『言論は日本を動かす』第3巻、1986年。

¹¹ 〔衛藤 2003b : 98〕。但し、衛藤は、「モッコス」を、「徒党を組まず、おのれの信ずる道を、ひたぶるに歩む純粹主義者」、「野分吹く山路を、ただひとり旅する孤高の士にたとえるべく、節を守って志を果たすために名利をかえり見ない。と同時に反面、狷介（けんかい）狭量、おのれのみ清しとして、他人との協力が不得手。人を推して親分にまつり上げる雅量がない」と説明、必ずしも良い意味ばかりで使っていない。

だが、渡辺京二がいうように、彼が評伝を書いた 1970 年代の時点では、「滔天の年譜類は、研究という研究がなされていなかったせいもあって誤りにみちてい」¹²た。そこへ、上村の「おそろしいほど詳細な」『兄弟伝』が世に問われることとなったので、これが「完全な滔天伝になることは疑い」ないと思われた。しかし、だとしても、「事実の研究は大げさにいえば日進月歩」¹³であって、筆者（高埜）の見るところでも、年譜の類、あるいは、（滔天が）誰といつどのようにして知り合った（出会った）等の史実については未だ明らかになっていない部分もある。そのことは本稿においても検討の対象としているところである。

さて、では筆者にとっては、なぜ滔天なのか。勿論アジア研究者として、また熊本大学の奉職して四半世紀を過ごす中で、彼は大いに興味をそそられる研究対象となった。また、松岡正剛のいう「これからの日本にこそ必要」な資質が、たしかに彼にはあるのではないかと直感的に感じられる部分もある。だからこうして 100 年も前のことをあれこれと調べて書いているのである。しかし、それだけではない。筆者のこれまでの人生と滔天は奇妙な縁で結ばれているのではないかと思わずにいられないことが多く、さらに彼に対する興味を深めたのである。

奇妙な縁

全く個人的な追想である。1973（昭和 48）年から 1976（昭和 51）年の約 4 年間、東京文京区にある白山神社の近くに住んでいた。当時、剣道少年だった中学生は、早朝、神社まで竹刀を携えて素振りに励んだりもした。その神社の境内に、1910（明治 43）年 5 月頃、当時の小石川原町（現在の白山 4、5 丁目と千石 1 丁目の一部）にあった滔天家に居候をしていた亡命中の孫文が、滔天と二人並んで腰掛けて中国の将来などを語り合った、とされる石がある。二人はそこで同年 5 月 19 日のハレー彗星を見た——それによって孫文は革命の成功を確信した——と伝えられる。実際はその時、孫文と一緒にいたのは滔天ではなく当時学生だった滔天の長男龍介（1892-1971）¹⁴だという説もある。龍介は、その 10 年後に「白蓮事件」で世間を騒がせる時の人となる。2014 年上半期に人気を博した NHK 朝の連続ドラマ小説「花子とアン」をご記憶だろうか。主人公村岡花子の親友「葉山蓮子」（こと柳原燐子）と駆け落ちをする若き法学士「宮本龍一」こそが宮崎龍介その人である¹⁵。一緒にハレー彗星を見たのが滔天と龍介のどちらだったかはさておき、その後、白山神社には孫文の来訪を記念して、1983（昭和 58）年 6 月に「孫文先生座石の碑」が建立された¹⁶。

¹² [渡辺 2006 : 370]。

¹³ 引用部分は全て [渡辺 2006 : 370]。

¹⁴ 龍介は中学生になった（1905＝明治 38 年）頃から、自宅に出入りする孫文ら中国革命家たちとの接触を持ち始め、後に「孫文の遺稿」（1925＝大正 14 年）などの孫文に関する文章も残した。詳しくは、[井上桂子 2016] を参照。

¹⁵ NHK の番組公式サイトは既に閉鎖されている。詳しくは Wikipedia (<https://ja.wikipedia.org/wiki/花子とアン>) を参照（大変詳しい）。また、NHK オンデマンドで番組を見ることができる。「花子とアン」<https://www.nhk-ondemand.jp/program/P201400117500000/index.html?capid=TV60>（いずれのサイトも筆者閲覧 2018 年 9 月 19 日）

¹⁶ 信太謙三「孫文が中国革命の成功を確信した場所——東京・白山神社境内」2015 年 1 月 2 日付。
(<http://www.nippon.com/ja/column/g00242/> 筆者閲覧 2015 年 9 月 4 日) および杉山茂雄氏の Facebook (<https://www.facebook.com/shigeo.sugiyama.129/posts/393517587490926> 筆者閲覧同上日) にも詳しい記述があり、参考にされたい。

筆者は記念碑建立の遙か前に白山から転出していたので、勿論それを見る機会はなかった。もとより当時その碑を目にしていたところで、どれほどの興味を惹かれたものか今となっては心許ない。付け加えると、神社のすぐ近くに昭和の碩学安岡正篤（1898-1983）の家があった。孫の定子氏¹⁷とは中学校で同学年であった。その頃は、やはり安岡正篤が何者かもよく知らず（何やら偉い学者との噂は聞いていたが）、定子氏とはよく話す機会もあったのに、当時まだお元気だったご祖父のことは全く訊きもしなかった。本稿の作成途上、滔天と孫文の関係を調べていくにつれ、滔天と安岡正篤は面識があったのかどうか、気になり始めた。40数年前、滔天の「と」の字も知らない中学生だったが、せめて辛亥革命や孫文について正篤翁がどのように考えておられたのか、実の孫娘に尋ねてきてもらうだけの知識と問題意識、そして度胸があったら、と今にして悔やまれる。

というのも、滔天は自分より一回り以上も若い北一輝（1883＝明治16年生）年や大川周明（1886＝明治19年生）とは直接親交があったからである。本稿では北や大川について詳しく触れる余裕はないが、弱冠24歳で『国体論及び純正社会主義』を自費出版したものの発禁処分となって意気消沈していた上、病床に伏していた一輝こと北輝次郎を、1906（明治38）年、滔天は自ら主宰する『革命評論』に招き入れて執筆させ、さらには中国同盟会にも加入させた（が、それが数々のトラブルを招くことにもなった¹⁸）。その北と大川が1919（大正8）年に国家主義運動結社「猶存社」¹⁹を結成した際、さらに一回り若い安岡（1898＝明治31年生）もそこに加わっていたのだ。その後、北と大川の対立が激化し、猶存社は1923（大正12）3年に解散、安岡は師と慕う²⁰大川と行動を共にし、「行地社」²¹結成に参加する（1924＝大正14年）。滔天か龍介のどちらかが孫文と一緒にハレー彗星を見たとされる1910年、安岡は生まれ故郷の大阪で中学に入学したばかりだった。まさか後年、孫文と滔天が訪れていた神社の近くに自分が住むことになるろうとは、その当時は知る由もなかっただろう。しかし、滔天が亡くなる1922（大正11）年までに二人が直接会ったことがあっても不思議ではないと思われるのだ²²。

中国革命への志

何しろ滔天こと宮崎寅蔵は、前述のように、年齢・国籍・出自・身分等々関係なく、誰とでも分け隔てなく接する人物だったからだ（反面、荒尾精の如く自分の主義主張と合わないと感じた

¹⁷ 正篤の二男正泰氏の長女。大学で中国文学を専攻された後、「子ども論語塾」などを主催されている。祖父正篤について『素顔の安岡正篤——わが祖父の思い出』（PHP研究所、1988年）という著書（エッセイ集）がある。

¹⁸ 滔天はわざわざ北に手紙を書いてコンタクトを取ったにもかかわらず、その後、北とは決別する。この間の詳細については、[近藤1984：62-78]を参照。[同左：67]に宮崎龍介の「北さんという人はゆく先々に不和对立をかもし出す人」との証言がある。

¹⁹ 「猶存社」は日本初の国家社会主義右翼系団体。ちなみに、滔天の一兄民蔵も名を連ねていた。

²⁰ 安岡による大川の人物評が、[橋川1962：99]に紹介されている。

²¹ 大川が中心となって設立した国家主義団体。北とは袂を分っていたが、北の著作『日本改造法案大綱』の理想継承を旨としていた。その後、大川派と北派に分裂し、1932（昭和7）年2月に解散。大川は神武会を設立、安岡はそれより早くに脱退しており、1926（大正15）年4月に私塾「金雞学院」を設立した。

²² しかし、『滔天全集』第5巻（[宮崎1976]巻末人名索引）および[上村2004]（巻末人名索引）をあたってみる限り、安岡正篤の名は見つけることはできなかった。

人物とは忽ち距離を置くようになるが)。彼の幅広く多彩な交友ぶりを物語るエピソードには事欠かない。たとえば、後の『狂人譚』²³のモデルとなる西洋乞食ことスウェーデン人イサク・アブラハム (Isaac Abraham, 1821～没年不詳) との出会いである。

1889 (明治 22) 年頃、若き寅蔵が長崎の加伯利英和学校に学んでいた頃のことだった。既に 1887 (明治 20) 年に東京で洗礼を受けていた²⁴寅蔵は、長崎の教会に「一片のパンの施し」を求めてやってきたアブラハムが、その教会の牧師と繰り広げる問答を聴き、キリスト教への疑念を高めてしまう²⁵。結局これがきっかけとなって寅蔵は棄教することになる。東京でかつての師徳富猪一郎 (蘇峰) に紹介された同郷出身の小崎弘道師によって洗礼を受け、母サキ (佐喜)、二兄の彌蔵までも熱心に口説き落として入信させたのに、である (彌蔵もその後、棄教するが、母サキだけはキリスト教徒として生涯を終えた)。寅蔵は何と長崎からアブラハムを連れて熊本荒尾の実家に戻り、彼が教える英語学校を建設しようと企てる。その資金提供を頼みに行ったのが、地元の有力者であった前田案山子 (かがし) 下学 (かがく) 親子であり、そこで出会ったのが下学の妹、槌子 (ツチ) であった²⁶。寅蔵は槌子に一目惚れした。

アブラハム自身はやがて不法滞在の嫌で国外追放となり、学校建設の計画は頓挫する。しかし、『三十三年之夢』 (以下、『夢』²⁷) によれば、この乞食先生は槌子との仲を取り持つという、寅蔵にとって「無心の媒酌者」、「情意を通ずる唯一有心の電話機」となり、「無形の大恩人」となった。どうやらアブラハムは、寅蔵には槌子の愛情深きことを伝え、槌子には「寅蔵は稀世の大人物」などと吹き込んだらしい²⁸。寅蔵は、前田家に滞留しているうちに槌子と婚約する。しかし、いざ結婚となると、しばし逡巡した。母サキも一兄の民蔵も賛成し祝福したが、他ならぬ二兄の彌蔵が「早婚の志士に害あり」と反対したからである (彌蔵は早世したこともあったが生涯独身だった)。実際、寅蔵と槌子が結婚するのは、もうしばらく先のこととなる。寅蔵自身も結婚を先延ばししたいという気持ちに変化し (あわよくば破談になればとすら願い)、ハワイに渡航して働いて金を作ってアメリカに留学するという、彼曰く「三十六計中の妙策」を思いつく。

この時、寅蔵は本当に長崎まで行き、船を待っていた。そこへ待ったをかけたのが彌蔵であった。東京にいた彌蔵は長崎まで飛んできて、寅蔵にハワイ行きを思いとどまらせ、(数年前にも一度打ち明けた) 中国人になりすまして中国に入り、中国を根拠地としてアジア全域で革命を起こ

²³ 『狂人譚』は、『三十三年之夢』が出版された翌月の 1902 (明治 35) 年 9 月、東京本郷の国光出版から刊行された。原文は [宮崎 2006a : 247-374]。併せて注 6 も参照のこと。

²⁴ [宮崎 1967] の年譜では (数えて) 17 歳の春、すなわち 1886 (明治 19) 年となっているが、渡辺は、それは滔天の誤記に基づいているとして、受洗は 1887 (明治 20) 年としている [渡辺 2006 : 94]。『滔天全集』第 5 巻「年譜稿」でも受洗は 1887 年春となっている [宮崎 1976 : 657]。

²⁵ 詳しくは [宮崎 1993 : 68-73]、[高野 1990 : 52-59]、を参照。

²⁶ 槌子の戸籍名はツチである。なお、夏目漱石の草枕のヒロイン「那美」のモデルとなったのがツチの 3 歳上の姉ツナ (卓子) といわれる。その他、前田家の人々については、ウェブサイト「漱石・草枕の里>草枕の歴史・前田家の人々」<http://www.kusamakura.jp/web/kouryukan/maedake-hitobito.html> が画像もまとめてあり見やすく参考になる (筆者閲覧 2017 年 10 月 1 日)。

²⁷ 原題は「…之夢」なので、本稿では、その内容に触れる際には「之夢」と表記するが、戦後の多くの復刻・改訂本の題名は「…の夢」なので、それらの書籍を指す際には、そのように記すこととする。但し、本稿における『夢』からの引用は、主として岩波文庫版 [宮崎 1993] に拠る。

²⁸ [宮崎 1993 : 71]。

すという彼の構想を弟に対して熱く語ったのである。寅蔵は、この長崎での一夜を「余が一生の大方針」を確立した夜と記している²⁹。寅蔵は、いったん熊本に戻って一兄の民蔵に計画を打ち明け賛同を得ようとするが、民蔵は「大体の精神において異存はないが、方法手段においては同意できない」と共闘を断る。但し、中国行の費用は自分が用立ててやるから、数カ月待てという。そこで寅蔵は彌蔵と共に上京し、自分たちも働いて金を作ろうとするが、寅蔵が思わぬ病気に罹り、しばらく入院する。そこへ槌子が看病をしにやってくる。彼女の優しさに、かつて破談を願ったことも忘れ、寅蔵は「入院が長引けば」と祈りさえする。ようやく快復した寅蔵は、民蔵から三百円³⁰の旅費を得て中国へ渡ることになった。『夢』によれば、それは1891（明治24）年5月のことであった³¹。一方の彌蔵は、「諸般の準備をととのえて」³²から寅蔵の後を追うと決めた。寅蔵は単身、上海へ渡るのである。

さて、衛藤藩吉が指摘するように、寅蔵を「中国革命へと説き導いたのが彌蔵であったことは言を俟たない」。しかし、彌蔵が「いかなる機縁で清国革命と結びついたかは、遺憾ながら（今のところ）判らない」³³。衛藤はまた次のようにいう。「なぜ清国革命と正義の実現とが結びつくのかよく判らない。しかし明治の青年にとっては、中国が活躍の場であり、正義とか革新とかを実現しうる舞台であることが感覚的にピンときたのであろう」³⁴。衛藤はこれを「ロマンティズムの焦点」が中国（清国革命）に合わせられたと解釈し、その要因を2点指摘している。一つは、中国が明治の日本人にとって適度の親近性同質性と適度の非日常性異質性を併せ持っていたこと、もう一つは、一兄民蔵の主張する土地復権運動、すなわち国内改革優先に対して滔天（および彌蔵）が主張したのは清国革命優先であり、目標とするところは世界の革命であったが、そのアプローチが異なったということである³⁵。

こうした疑問および説明に対する上村希美雄の解釈は次の通りである。すなわち、「熊本の青年たちの胸に大陸雄飛の夢が肥っていった」背景には、「やはり維新以来の肥後藩に濃密だった政治的風土の影響を真っ先に考えざるを得ない。」要するに「維新のバスに乗り遅れた上に、十年戦争（西南戦争）でも向背を誤って賊軍の名に甘んじた肥後士族の主流は、その鬱勃たる覇気を海彼

²⁹ [宮崎 1993 : 76-79]。但し、この兄弟の会談がいつであったかについては諸説あり、上村希美雄は明治24（1891）年の6～8月であると推定し[上村 1984 : 188]、榎本泰子も1891年夏としているが[榎本 2013 : 25]、渡辺京二は「明治23年に入ってから滔天の足どりはさだかではない」とし、ハワイ渡航の計画と、彌蔵との長崎での一夜は、明治23（1890）年中の出来事「でなければならぬ」と書いている（[渡辺 2006 : 101]）。『滔天全集』第5巻の年譜稿によれば、1891年前半ということになるが、月日については「？」が付いている。[宮崎 1976 : 659]。

³⁰ 当時の1円は、現代（2010年代後半）の貨幣価値で4,000～6,000円と見積もられる。

³¹ 滔天本人は、『夢』の中で上海への初渡航は明治24（1891）年5月であると記しているが（[宮崎 1993 : 84]）、近藤秀樹が編集した『滔天全集』第5巻の年譜稿では、それは明治25（1892）年4月のこととなっている。[宮崎 1976 : 659]。上村も明治25年説を取っている（[上村 1984 : 201-204]）。

³² 慢性胃腸病（実際には腸結核）に苦しめられていた彌蔵は、まずその根治を優先した。[上村 1984b : 199-202]。

³³ [衛藤 2003b : 84]。初出は『思想』1968年3月号。（ ）は高埜が追加した。

³⁴ [衛藤 2003b : 85]。

³⁵ [衛藤 2003b : 85-87]。

なる大陸へ傾注することで満たし得ない己れの功業意識を補填しようとした」³⁶というのである。また、彌蔵に影響を与えたのは、明治 20 年代に大陸に渡った熊本出身者たちであり、その中には、寅蔵が初めて上海に渡った際に現地で頼りにした宗方小太郎や、長兄八郎に影響を受けて中国に渡り、その後、消息を絶った浦敬一らが含まれるとされる³⁷。上村は、(明治)「20 年代初頭の熊本とは、大陸に関する情報を意外に豊富に集め得る土地であったし、その道の先輩・先達者にもこと欠かなかったろう」と推測している³⁸。付言すれば、西郷の影響もあったかもしれないと上村は指摘している³⁹。

ところが、「これ支那大陸なり。すなわち、久しく夢寐の間に髣髴たりし第二の故郷なり。(中略)余の感慨やいよいよ切なり。余は船頭に立って顧望低徊して、遂に泣けり」と、感無量の様子で記した寅蔵最初の中国行は、渡航直前に長崎時代の旧友に金を貸したが最後、騙し取られたことが災いして何の成果も挙げられず——さりとて荒尾精の日清貿易研究所には世話になりたくない——、やむなく「悄然として郷に帰れり」という結果に終わった。帰国してみると、槌子が既に妊娠 6 カ月であることが判明し、結局、革命運動どころではなく、1892 (明治 25) 年 7 月、いよいよ観念して式を挙げることとなった。同年 11 月、長男の龍介が誕生する。ちなみに、寅蔵は、自身の上海初上陸については、その後ほとんど何も語っていない⁴⁰。

さて、その後も寅蔵の交友関係そして人生は、彼自身の言葉を借りれば、「嗚呼、因縁なる哉。浮世は善悪共に総て因縁づくで、からみからみ廻り廻って進んでいく」⁴¹。そのハイライトとなるのが孫文との出会いであったのはいうまでもないが、そこに至るまでに (またそれ以後) 寅蔵が大きく影響を受けた何人かとの出会いと親交があった。具体的には、金玉均、犬養毅、頭山満などである。これらの人々は寅蔵の中国革命への志と実質的に関わりを持つこととなったし、また、寅蔵が孫文を犬養や頭山に引き合わせたことによって孫文の革命運動もさらなる広がりを持つことになるのである。

金玉均との交遊と別れ

「夢寐の郷国に入る」に続く『夢』の続きに付けられた標題は「無為の四年間」である⁴²。彌蔵が胃腸病と闘いながら英仏の学 (ギリシャ史やローマ史、さらにはジョン・スチュワート・ミルの著作等) を修めつつあったところ、寅蔵は「恋愛と戦い、生計と闘うて、三年の星霜を夢の如くに消過」したのであった。そのような折、寅蔵は彌蔵を訪ねて告げた。かねて知己を得ている「朝鮮亡命の士」金玉均——朝鮮、日本、中国の同盟によって西欧に対抗するという「三和主義」を唱えていた——に会いに行って中国革命への志を説き、助力を仰ぐのはどうか、と。すると彌

³⁶ [上村 1984b : 171-172]。

³⁷ [上村 1984b : 162-189] あたりを参照のこと。

³⁸ [上村 1984b : 178]。

³⁹ [上村 1984a : 399-400]。

⁴⁰ [上村 1984b : 215]。

⁴¹ 「金玉均先生を懷ふ」[宮崎 1973 : 285] および [書肆心水 (編) 2008 : 51]。

⁴² [宮崎 1993 : 87-99]。衛藤は「(寅蔵の) 青春時代の中でもっとも穏やかな、新妻とともに家庭生活を営んだ時代」と述べている [衛藤 2003b : 104]。但し、寅蔵自身には葛藤があり (その幸せな家庭生活が「何やら恐ろしくなり来たり」)、それがこの標題に表れているといえる。

蔵もこれには大いに賛同した。寅蔵はすぐさま上京した⁴³。

「金玉均先生を懷ふ」⁴⁴によれば、初めて寅蔵が金と知り合ったのは1891（明治24）年頃、東京有楽町の金の住まいに居候をしていた同郷（熊本）出身の田尻一喜⁴⁵の紹介によってであった。その後も寅蔵はたびたび金を訪ねては「朝鮮問題や東亜問題や人物評論を拝聴した」という。最後の面会となったのが、1894（明治27）年の初春、寅蔵が、有楽町の住まいではなく、金が潜伏中の芝浦見晴の海水浴旅宿（のちの竹鶴館）を訪ねて中国潜入計画を打ち明けたときだった。寅蔵は、その準備資金として一万円を用立ててもらえないかと頼みに行ったのである。この時、金はわざわざ田尻に命じて漁舟を出させ、船上で杯を傾けつつ密談に興じた。この時のことを寅蔵は「もう嬉しさが一ぱいである」と回想している。

寅蔵は、兄の彌蔵と話し合って決めた「自己の志の外には遠慮も会釈もない」——いわば青臭く壮大な——少年革命家の計画を金に打ち明けた。すなわち「支那に入って支那人になり済まし、一大革命を行うて興国の氣運を煽り、祖国なる日本と根本的同盟を結んで興亜の基礎を固め、人道を口にして亜洲人を奴隷視する白人に一泡吹かせたいと云う」計画である。後年の滔天は「アレ程聡明な」（金）先生に滔々と弁じたてた「その迷惑や察せられるる」と思い出しは恐縮するのだが、当時の金は寅蔵に、「今日以後の事、ただ支那あるのみ。朝鮮のごときはこれ途辺の小問題物たるに過ぎずして、結局の運命は支那問題に待たざるべからず」⁴⁶と同意を示し、「君のような卓抜な真面目な議論は始めて聴いた」と膝を叩いて喜び、二人は大いに意気投合した。金も寅蔵に打ち明ける。実は近々中国に渡って李鴻章と会談する。今回は1か月で戻ってくるが、頭山満、福澤諭吉、後藤象二郎と内々に相談していることがあるから、間違いなく金が出る（当時の二百万円とも三百万円とも見積もっていた）。その金を持っていずれは中国に永住するつもりだ、と。では今回も護衛として是非同行させて下さいと懇願する寅蔵に対し、金は、「君の容貌風采では人目を惹いて困る」とそれを断る。しかし、その後は前編に述べた通り、同年3月に上海に渡った金が暗殺されて、寅蔵の計画は叶わぬ夢となってしまったのである⁴⁷。

寅蔵は本当に金を慕っていたのであろう。それは、以下のような文章から窺い知ることができ

⁴³ [宮崎 1993 : 88-89]。寅蔵の金玉均に対する人物評は、「殆ど家なき国なくの人、…といえども
まなこ眼大局を洞察するの明あり。」すなわち「帰る国も家も失った人だが（それゆえに自らの野心はないが）大局観を持ち合わせた聡明な人」という、ある意味ナイーブな見方だった。

⁴⁴ この全文は、[宮崎 1973 : 281-285] および [書肆心水（編）2008 : 45-51] に収録。元々は金の23回忌祭に配本する目的で編まれた非売品、葛生玄皐編『金玉均』（1916＝大正5年3月28日発行）への滔天の寄稿。以下の引用部分は全て同上寄稿文より。

⁴⁵ 田尻一喜（市喜）は、1888（明治21）年頃、正則熊本英語学校に学んでいた時代の滔天が出入りしていた二兄彌蔵の同志グループ「熊本藪の内連」（熊本社会党とも呼ばれた）のメンバーの一人であり、慶應義塾で犬養毅と共に学んだといわれる（が確証はないようだ）。後に玉名おあま小天村の村長を長く務めた。

⁴⁶ この部分は『夢』からの引用である。[宮崎 1993 : 90]。

⁴⁷ 金玉均とのエピソードは、[立野 1966 : 8-12]、[上村 1984b : 250-253]、[高野 1990 : 71-82]、[榎本 2013 : 42-45]、[加藤 2017 : 106-110]などを参照。それにしても、立野や高野は、『夢』など滔天の文章を底本に脚色をしたのだろうが、よくも、その時、そこでそのような会話が実際に交わされていたかのように書けるものだと感心させられる。[上村 1984b : 224-253]は、さらに詳しく金について1章を割いて述べている。

る。一つは 1898=明治 31 年 8~10 月、寅蔵二度目の中国行の際、最初に到着した上海で金が暗殺された東和洋行に投宿し、まさに金が洪鍾宇に射殺された部屋に泊まって、その魂を慰めたいと思ったが他の客が泊まっていたので叶わなかったと書いていること⁴⁸。もう一つは、1918=大正 7 年 10~11 月、滔天が「朝鮮通」の甥、築地房雄⁴⁹を伴って生涯に一度だけ朝鮮に渡った時のことを書いた「朝鮮のぞ記」⁵⁰である（同年 11 月 26 日~12 月 4 日、『上海日日新聞』に 8 回連載）。その冒頭、「朝鮮は要事の無いところで、曾て一度も其地を踏んだことがなかった」が、「朝鮮人には多少の因縁があった、否大ありでした」と、自分にとっては初めて会った「世の名士」金玉均を「私が此人はと見込んで、支那革命の志願を打ち明けた第一人」と偲んでいる。また、下関から一晚をかけて船で釜山に到着して洛東江を眼下にした際にも、「故金玉均君の事が又もや胸を衝いて追憶を呼び起し」、かつて金から聞いた洛東江にまつわる故事を甥の房雄に話して聞かせるのである⁵¹。

さて、金玉均の突然の死は寅蔵と彌蔵の兄弟に多大の衝撃と落胆を与えたが、その死は二人に、その後の革命運動への関わりに決定的となる人脈形成の端緒を開くことになる。1894（明治 27）年 5 月 20 日、金の追悼会が東京浅草東本願寺で、会葬式が青山墓地で執り行われた⁵²。金の遺体は清国警察によって奪われた後、八つ裂きにされたが、同行した書生和田延次郎がかろうじて持ち帰ってきた遺髪と衣服の一部を埋葬したのである。会葬式にも参列した寅蔵は（再び田尻一喜の紹介で）、金と「兄弟の契りを交わした」という南岬こと渡辺元と知り合う。渡辺は長崎市郊外で石炭・海産物から鉱山経営に至るまで事業を拡大、亡命中の金を援助し、さらには金と共に何らかの事業（朝鮮での鉱山事業か）を計画していると当局から目を付けられてもいた人物であった⁵³。また、寅蔵たちの長兄八郎のことも知っていた。葬儀の後、渡辺は寅蔵に自ら仮寓としていた銀座の洋装店「伊勢幸」を訪ねるよう促し、数日後、寅蔵はこれに応じた⁵⁴。寅蔵は渡辺を「無名の英雄」⁵⁵と呼んで敬意を表し、その後、革命運動への支援を頼むこととなる。

前編でも述べたように、金の暗殺は日本国内における対清開戦の世論を沸騰させ、ついに 1894（明治 27）年 8 月 1 日、日清戦争が勃発した⁵⁶。そのような中で、一方で寅蔵は、やはり金の葬

⁴⁸ 「支那だより（「上海にて」の節）」、初出は『九州日報』に連載。[宮崎 1976 : 193]。

⁴⁹ 築地房雄は、寅蔵の二番目の姉（富）が嫁いだ築地貞俊の長男。貞俊は、熊本民権党、協同隊における長兄八郎の同志であり、西南戦争にも従軍したが、「免罪」されている。[上村 1984a : 40, 99, 171, 174]。

⁵⁰ [宮崎 1973 : 359-371]。

⁵¹ 引用部分は、[同上 : 359, 364-366]。

⁵² 浅草には千数百人が集い、あたかも対清決起集会の様相を呈した一方、青山墓地への埋葬には近親者 30 名ほどのみが参加したのみだったという（しかも参加者は浅草から青山まで歩いた）。

⁵³ [高野 1990 : 80]、より詳しくは [上村 1984b : 247-248]。

⁵⁴ 『滔天全集』第 5 巻年譜稿。[宮崎 1976 : 660]。なお、伊勢幸の女主人青木たけは渡辺の愛人であり、金玉均宛ての書簡を整理していたりしたので、警察の尾行もついたという逸話も持つ「女傑」であった。[上村 1984b : 266]。

⁵⁵ [宮崎 1993 : 92]。

⁵⁶ 日清戦争をめぐる当時の言論的状況と、戦争に対する寅蔵および宮崎兄弟の考えや姿勢については、[加藤 2017 : 110-118] および [渡辺 2006 : 140-141] を参照。簡単に言えば、宮崎三兄弟はいずれも戦争に「無関心」ないし距離を置くという態度であった。また、この時期（日清戦争勃発の約 1 か月後=1894 年 9 月 6 日）には寅蔵の次男震作が生まれている。

儀の際に知り合った金の愛人杉谷玉が示してくれた好意にすがり、玉の地元である函館に赴いて中国語教師を探して中国語の勉強に専念しようとする。ところが戦時下のことゆえ、教師になれそうな教養ある中国人は皆本国に帰ってしまっていた。函館での中国語学習計画は挫折する。万策尽きた寅蔵は、再び、翌年（1895＝明治28年、月日不詳）渡辺元を東京に訪ねる。今度は彌蔵も同行させた。熱心に中国革命への夢を語る彌蔵に対し渡辺は、横浜の支那商館（洋服生地の入商）を知っているから、そこに潜入して中国語および中国の風俗習慣を身に付けてはどうか、と提案する。彌蔵はいったん躊躇しながらも諒承し、実際に横浜の商館に住み込むようになる。中国服に中国帽、辮髪までもたくわえ、全く中国人になりきったのである。一方の寅蔵は、これもまた前編に記した通り、広島に移民会社を頼り、シャム（タイ）に移民を率いて行った。

彌蔵の死、犬養との出会い

実は、このタイ行にも、華僑が多数住む同地において中国語と中国文化の習熟に努めるという隠れた目的があった。1回目の渡泰（1895年10-12月）⁵⁷の後、いったん広島に戻った寅蔵は、11月に病気を再発させていた彌蔵に呼ばれて、年末に横浜の療養先で彌蔵と会い、数日間を共にした。しかし、これが生きている彌蔵に会う最後となった。寅蔵自身も2回目の渡泰（1896年4-6月）の際に（疑似）コレラに罹り、生死の境を彷徨った。奇跡的に回復した寅蔵は帰国の途に着くが、6月（初旬と推測される）に門司港に帰って来るや否や、熊本の母サキ（佐喜）と横浜にいる彌蔵が共に病気であることを知らされる⁵⁸。寅蔵はまず熊本に戻って入院先に母を見舞う。ちょうど彌蔵から熊本の実家に手紙が来ていた。病気から回復しつつあるから心配するなという内容だった。すると7月4日、彌蔵危篤の急電が来る。急いで——といっても当時は熊本から横浜まで二昼夜かかる——一兄民蔵と共に向かうと、到着した時、彌蔵は既に事切れていた。二人が東京品川の東海寺別院に安置された彌蔵の遺体と対面したのは1896（明治29）年7月6日のことだった。翌7日、東海寺で彌蔵の葬儀が行われた。参列者の中には、伊勢幸の女主人青木たけなどに交じり、宮崎兄弟とは同郷出身の、長缺こと可児長一⁵⁹がいた。

さて、彌蔵は29歳という若さで死んだ。死の直前まで世話になっていた親友（野崎福太郎⁶⁰）に宛てた遺書と、母サキと兄民蔵に宛てて書き残していた辞世の句があった。

マ ス ラ オ アズサユミ
大丈夫ノ真心コメシ 梓弓 放タデ死スルコトノクヤシキ

上村の表現を借りれば、「続く世にも絶えてないほどの大きなスケールをもつ革命思想を構築した男が、その未発に終わった志の継承を後代に向って問わんとする」かのような「真摯で勁烈な一

⁵⁷ ちょうどこの時期（1895年10月）、孫文は広州で第一次広州起義を画策するが、未然に清朝政府の知るところとなり、蜂起に失敗する。清朝政府に追われる身となった孫文は海外に亡命したのである。

⁵⁸ これを知らせたのは福岡の玄洋社社員の野半介であった。寅蔵と玄洋社の関係については述べるべきことが多いのだが、本稿ではこれ以上は詳しく触れない。

⁵⁹ 可児は1871（明治4）年、葦北郡佐敷の生まれで、明治24年頃、慶應義塾を卒業したとされるが、上村希美雄も、その経歴は詳しくは「わかっていない」と述べる。[上村1987: 17]。

⁶⁰ 野崎についても上村は彌蔵の「重要な友人」としながらも「身許不詳」らしく、詳しいことはわかっていない。[上村1984b: 375]。

首」⁶¹である。それは間違いないが、同時に何とも言えぬもの哀しさを湛えた歌ではないか。

彌蔵は死んでしまった。しかし、犬死したわけではない。彼は寅蔵が第2回目の渡泰を控えて長崎にいる間、帰京していた渡辺元のもとに手紙を寄越していた。寅蔵は渡辺を訪ねてその手紙を見せてもらっていた。それは、彌蔵が中国の革命家（後に孫逸仙だとわかる）の同志陳少白⁶²と知り合ったこと、しかもその陳と大変に意気相通ずるものを感じとったという内容であった。寅蔵は、その手紙を「長文の一書、字々みな生氣あり、句々ことごとく活動す。（中略）二兄がいかに興奮せるかを推知するに足る。読むもの、豈に感慨に堪ゆべけんや」⁶³と表現している。ところが実際には、自分が渡泰を控えていたこともあり、「自分だけでなく渡辺先生も同意見」などとわざわざ断って、慎重を期すべきだ、しばらくその中国人と距離を置くべきだ、と警告したのである。寅蔵は後年、そんなふうに戻信したことを大変に悔やんだ。彌蔵がもし「その支那人と交通し、多年鬱積せる襟懷を披歴して、自己胸中の春風を煽りたらんには、あるいは彼のごとき悲惨の最後を遂げざりしならん」——すなわち、自分の返信が兄の寿命を縮めてしまったのではないか、と⁶⁴。

自らの「活動の源泉」と呼んだ二兄が死んだ後、寅蔵はしばらく悲嘆に暮れ、「茫然自失して、為すところを知ら」ない状態に陥る⁶⁵。しかし、途中で放り出した格好になっていたタイの植民事業を何とかしなければならなかった。移民の中から、状況に絶望して自殺する者も出た、との報告も聞いていた。寅蔵は、タイの植民（植林）事業に資金援助をしてくれそうな有力者、篤志家を探そうと——初上京以来、定宿としてきた芝愛宕の対陽館を根城に——東京を駆けずり回った。そんな中 1896（明治 29）年 10 月 4 日、兄彌蔵の月命日に因んで招魂祭が開かれることとなった。

これを主催したのが前述の可児長一である。可児は寅蔵に（当時、進歩党議員の）^{もくどう}木堂こと犬養毅を訪ねてタイの移民事業の件も相談してはどうかと提案した。寅蔵は（敬愛する板垣自由党の敵として）改進黨・進歩党を毛嫌いしていたので、最初は可児の提案に耳を貸さなかった。しかし、慶應義塾に学び犬養邸に寄食して書生をしていた可児が、「口を極めてその人物を賞説し、心を尽くして勧誘する」ものだから、「余が心ついに動けり。」犬養に会った寅蔵は、「天縁なるかな、余が方針の一転機はこの時に在り」と、当初の毛嫌い（食わず嫌い）はどこへやら、「余はすでに直覚的判断を下せり、これは好きな人わい、と」犬養に好印象を抱くのである。結果的に可児は寅蔵に、革命運動への情熱に再点火する「一条の導火」（線）をもたらしたのである⁶⁶。

しかし、犬養は寅蔵と会うなり、タイでの植民・植林事業は無理だから諦めろという。もし、どうしてもやりたいなら、やはり進歩党議員の「背水將軍」こと中村弥六を紹介するから訪ねろという。寅蔵は中村にも会いに行くが、林学博士でドイツ留学経験もあり材木業も営む中村をし

⁶¹ [上村 1984b : 389-390]。

⁶² 陳少白は孫文と同郷の幼馴染で、香港西医書院の同窓生でもあった。たとえば、[田所 2011 : 43-44] を参照。

⁶³ 『夢』「二兄の書簡は新事実の報告なり」[宮崎 1993 : 130]。

⁶⁴ 『夢』「この一段は愚痴の気味あり」[宮崎 1993 : 132]。

⁶⁵ 『夢』「余が活動の源泉は涸れたり」[宮崎 1993 : 157-158]。

⁶⁶ 以上、引用部分は、全て『夢』より。[宮崎 1993 : 158-160]。渡辺京二によれば、「犬養との出会いが滔天の半生を決定した」のである。[渡辺 2006 : 163]。

て、「到底素人の手に」は負えぬ事業だと言うので、寅蔵は再び犬養を訪ねる。犬養は寅蔵の本心が実はタイにはないことを見抜く。前編でも触れたが、「君はなぜその髪を伸ばしておるのか」、「物好きに」という会話がきっかけだった。犬養は「そんな顔では金儲けはできん」などとしきりに言うので、寅蔵は「金儲けは手段であって別に目的がある」と言ってしまう。寅蔵は「遂に志支那にあることを告げ、かつ一臂の援助を与えられんことを請う」た。犬養は、この話の方によほど合点が行ったと見えて、「諾、しばらく昼寝でもして待っていたまえ」寅蔵に告げる⁶⁷。

犬養は外相の大隈に「中国秘密結社の調査」という名目で外務省機密費を出させて、寅蔵たちを中国に派遣する算段だった。しかし寅蔵は犬養に言われた通り同志の南万里こと平山周⁶⁸と宿で待っていると次第に気持ちが倦んできて、酒を飲んで「南品北芳」（南は品川、北は吉原）で女郎屋通いを繰り返す⁶⁹。そのうち寅蔵だけが「入院して手術が必要」なほどの重い性病に罹ってしまう。おまけに「たまたま数病一時に併発して、身命ほとんど危からんとす」る状態に陥った⁷⁰。それにしても、『全集』5巻の年譜稿を見ると、病気に罹ったのが1896（明治29）年の11月頃となっているのに、年明けて1897（明治30）年の3月に入退院とあり、相当長引いたよう

だ。寅蔵は、「意を決して一書を草し、事情を具陳して雲翁^{うんおう}の憐みを請う」た。すると金四〇円を用立ててもらえたので、上野桜木病院に入院することができた。雲翁とは立雲こと頭山満である⁷¹。寅蔵は、最初、木堂こと犬養にこのことが知れるのを恐れて黙っていたが、ほどなくばれて、逆に犬養の千代夫人の手厚い看病を受けることになる。「雲木二翁の恩顧なくんば、余の命ここに窮まりしやも知るべからず」と、この二人には頭が上がりなくなるのである⁷²。

最初は4月下旬に中国行を予定して準備をするも病気が再発したり、別の病気に罹ったりしたため、同行予定だった平山周と可児長一が先に5月に出発した。寅蔵が長崎から香港行きの船に乗って出発するのは同年7月のことであった⁷³。

⁶⁷ このくだりも全て『夢』より。[宮崎 1993 : 161-163]。

⁶⁸ 1870-1940、福岡出身。寅蔵とは東洋英和学校時代からの知り合い。号は南万里。後に『革命評論』にも参加したが、滔天とは袂を分かち、また孫文の信頼も失う。詳しくは、島田虔次による『夢』の注一二五2 [宮崎 1993 : 396] を参照。

⁶⁹ 「カネがなくても酒を呑み、女とあそぶ滔天である。カネがあれば、もっと呑み、もっとあそぶ」とは [高野 1990 : 140] の表現。

⁷⁰ 『夢』 [宮崎 1993 : 163-165]。

⁷¹ 引用は『夢』 [宮崎 1993 : 163]。頭山は「雲翁」として『夢』の初っ端（「自序」）から登場するのだが、寅蔵とは、いつ頃どのようにして知り合ったかについては、未だにはっきりわからない。

『夢』本編の中では、この時期（1897年春、2度目の中国行を控えての入院の頃）、「先輩雲翁」と、やや唐突に登場する。三好の小説によれば、寅蔵は頭山に「会ったことがな」かったが手紙を書いたことになっている [三好 1983 : 198-199]。しかし、頭山は、既に1884（明治17）年、中江兆民、樽井藤吉らと韓国・釜山に語学学校「善隣館」を設立する計画に加わっており、そこには後に寅蔵の義兄となる前田下学も加わっていた。また、寅蔵が後に1907（明治40）年5～6月にかけて『黒龍』（黒龍会機関誌）に発表した「續三十三年之夢」の中で、一兄の民蔵について「先輩立雲翁の賛助を得て、その少年時代より主張し来れる土地公有主義を唱道して」云々と書いている [宮崎 1971 : 236-244] ことから、かなり早い時期から互いを知る関係だったと見るのが自然ではなかろうか。

⁷² 『夢』「この誼忘るべからず」 [宮崎 1993 : 164]。

⁷³ 『滔天全集』第5巻「年譜稿」参照。[宮崎 1976 : 664-665]。

さて、犬養と知己を得た後の寅蔵は、依然としてタイの植民事業への援助を頼みに（犬養の紹介で）外務次官の小村寿太郎を訪ねたり（1896年10月）、結局は移民会社を正式に辞職したり（同年12月）、毛嫌いしていたはずの外務大臣大隈重信に面会して中国渡航のための外務省機密費支給の約束を取り付けたり（1897年2月）、土地均等法を欧米の有識者に説く外遊に出る一兄民蔵を横浜に見送ったり（同月）、はたまた長女のセツ（節子）が生まれたり（同年4月）、と慌ただしい日々を送る。

漸く病気も快復して中国行の準備に入るが、前編でも触れたように、民権活動家の小林樟雄^{くすお}に挨拶に行った際、かつての長兄八郎の同志、興亜会創立者の一人でもある曾根俊虎と偶然出会う。この曾根が寅蔵に、——「もしや兄彌蔵が会っていた中国人では」と寅蔵自身も直感した——陳少白を紹介するのである。寅蔵は、中国（香港）への出発直前に横浜に陳を訪ねた。寅蔵の予感は見事に当たった。彌蔵の死を告げると陳は大いに残念がったが、“Sun Yat Sen kidnapped in London”と題した1冊の英文の小冊子を寅蔵に手渡し、自分が孫逸仙を首領とする興中会のメンバーであることを告げた。香港に着いた寅蔵は先に到着していた平山と共に興中会の同志を訪ねて回るが（可児は既に帰国済みだった）、日清戦争後のこと、日本人に対する不信感も手伝って警戒心が高く、情報収集がうまくいかない。そこへ8月中旬、第一次広州起義に失敗して亡命中の孫逸仙が、何と5月にはイギリスを脱して日本に向っているとの情報を得る。寅蔵と平山は急ぎ帰国した。9月初旬、横浜に到着して投宿先で旅装を解くやいなや、二人は陳少白の寓居に直行する。

孫文との邂逅

すると、陳少白は留守であった。留守を預かっていた女中が「（陳は）2、3日前に出かけた」、行き先を尋ねると台湾だという。では誰もいないのか、と問うと、1週間くらい前にアメリカから到着した客が1人いる、という。寅蔵は孫逸仙に違いないと心躍らせるが、その日は外出して会うことができなかった。翌朝早く寅蔵が一人で再び訪ねると、「客」はまだ寝ているという。彼が起きるのを待っていると、ほどなくして寝間着（パジャマ）姿のままその客は出てきて寅蔵と会った。これが終生の友となる孫文こと孫逸仙と寅蔵の初対面であった⁷⁴。

寅蔵は孫文の最初の印象を「少しく軽躁^{けいそう}」で「挙止動作の漂忽^{ひょうこつ}にして重みなきところ」に「いささか失望の心を生ぜしめぬ」と書いている。洋装に着替えて整髪してきた後でさえ「なお何となく物足らぬ心地せり」と感じた⁷⁵。しかし、いったん革命への志について語りだすと、その印象は全く異なった。尤も両者のコミュニケーションは筆談、しかも若くして海外に学んだため、さほど達者ではなかった孫文の中国語と、孫文は達者だが滔天はブロークンの英語会話に拠った。「開口一番共和の政を説き、革命は余の責任と言ひ、積弱の中国から人民を解放する志を有する」と述べた孫文に相對した寅蔵は、「たちまちその言に魅了されざるを得なかった。」そして寅蔵

⁷⁴ 寅蔵と孫文の初対面の様子は『夢』[宮崎 1993 : 177-183] に詳しい。これを [近藤 1984 : 52] は「もっとも感動的で有名な箇所」といい、[衛藤 2003b : 106] は「圧巻」と表現し、[榎本 2013 : 60-61] は「生き生きと描かれ、最も興味惹かれるくぐり」と書き、[上村 1987 : 133] は、「委曲をつくして描き出している」と、いずれも高評価である。

⁷⁵ 引用部分は全て『夢』「孫逸仙君との初対面」[宮崎 1993 : 178-179]。

は、孫文をある人物の面影と重ね合わせる。誰あろう兄の彌蔵である。「彼」以外に「これほど明快にみずからの革命の精神について語る」、「生きていることすなわち革命することと信じきっている人間に初めて会った」⁷⁶と感じたのだ。孫は続ける。「支那四億万の蒼生を救い、亜東黄種の屈辱をすすぎ、宇内の人道を回復し擁護するの道、ただ我国の革命を成就するにあり」⁷⁷——要するに、中国のみならずアジア黄色人種、さらには世界のための平和を説く——その思想は高尚、識見は卓抜、抱負は遠大、情念は切実、日本にはこんな人物が果たして何人いるだろうか。「誠にこれ東亜の珍宝なり」と、寅蔵は孫文の人間にすっかり惚れ込んでしまったのだ⁷⁸。

ほどなく寅蔵は孫文を犬養に引き合わせる。同時に寅蔵は犬養に指示されて、外務省機密費を使って「中国秘密結社の調査」に行った行きがかり上、外務省に顔を出した。すると外務次官の小村寿太郎は報告書を作って出せ、という。しかし、寅蔵は、(結社に関する報告書より)実物(の革命家)を一人連れてきた、と言ったものだから小村も面喰った。小村からすれば、孫文は清朝政府にとってのお尋ね者、そんな人物に日本の外務省が関わるわけにはいかない。しかし寅蔵はいう。「役人には役人の都合があるだろうが、自分たちには自分たちの都合がある。役人が驚こうが、自分たちはすべきことをするのみだ」⁷⁹。犬養が周旋して孫文と陳少白は東京早稲田鶴巻町に住処を得た。名目は平山周の語学教師。生活費は頭山満を介して元玄洋社社長の平岡浩太郎が出すことになった。こうして孫文の日本における亡命生活は始まった。

一方、寅蔵は当時、熊本・荒尾の実家にいる妻ツチと3人の子に大変な困窮生活を強いていた。長崎の渡辺元に資金援助を頼んで石炭販売業を開業させてもらったりするがうまくいかず、いよいよ金策尽き果て、寅蔵が熊本にいったん帰郷することとなる。1897(明治30)年9月下旬のことだった。すると、孫文が寅蔵を熊本に訪ねたいという。11月、孫文と台湾から戻ってきた陳少白は、何と荒尾の宮崎家を訪れるのである。この時、孫と陳は10日間ほど宮崎家に滞在し、来訪した宗方小太郎とも会ったりしている。その後、寅蔵、孫、陳は長崎に赴き、渡辺元と会う。この時に渡辺が寅蔵に「白浪庵滔天」の雅号を贈ったとされている⁸⁰。翌1898(明治31年)5月、寅蔵は的野半介に請われて、玄洋社機関誌『福陵新報』を改題した『九州日報』(主筆古嶋一雄)の「番外記者」となり、同紙に初めて「滔天坊」の名で孫文の”Kidnapped in London”を「清国革命党領袖孫逸仙 幽囚録」として翻訳・連載する⁸¹。日本では半ば無名であった孫文は、滔天こと寅

⁷⁶ 引用部分は、[上村 1987 : 134]。

⁷⁷ 『夢』[宮崎 1993 : 182-183]。

⁷⁸ 『夢』「余はこの時を以って孫君に許せり」[宮崎 1993 : 183]。しかし、[渡辺 2006 : 160-161]

は、初対面の場面の情景描写はさておき、孫文の語った言葉は「格別どこといって感心することもない、いたって平凡な思想」とにべもない。尤もこれは(筆者は未読だが)、鈴江言一の孫文評に依拠してのことのようである。一方、[上村 1987 : 139]は、同じく鈴江の評価を踏まえながらも、孫文の革命理論そのものは「その実践と共に発展進化した」と述べ、初対面時の滔天の孫文評は、「革命家孫文誕生の秘密」が「孫自身の著述よりも数倍生彩に富む筆致で解き明かされている」と記している。

⁷⁹ 『夢』「官員様と余らは別物なり」[宮崎 1993 : 184]。口語訳は高埜による。

⁸⁰ この間の記述については、『滔天全集』第5巻の年譜稿による。[宮崎 1976 : 666]。[上村 1987 : 143-147]にも詳しい。

⁸¹ 『滔天全集』第1巻に収録。[宮崎 1971 : 425-469]。元々の連載は『九州日報』明治31年5月10日～7月16日。

蔵の紹介によって、その名を広く知られるようになるのである⁸²。

さて、ここまでで漸く寅蔵（滔天）と孫文が出会ったところまでを描いたが、この調子で辛亥革命の成功（1912＝大正元年）、さらに滔天の没年（1922＝大正11年）までを書いていくと上村希美雄並みとは言わないにしても、途方もない長さになることが予測される。したがって、以下、1900（明治33）年10月の惠州起義（事件／蜂起）の失敗から、翌1901（明治34）年末頃に滔天が浪曲師を志し、実際に翌1902（明治35）年から浪曲師として活動を始める時期までを対象として、滔天と孫文の関係において特に重要な出来事とその意味するところをまとめてみたい⁸³。それはちょうど滔天が『二六新報』に「白浪庵滔天」の名で「三十三年之夢」の連載を始める時であるが、「夢」破れた滔天は「落花の夢」を歌うドサ回りの浪曲師に身を窺してゆく、というところで「三十三年之夢」の記述も終わるのである⁸⁴。

中国革命における滔天の役割とその評価

孫文と出会った翌年1898（明治31）年の夏、滔天は、再び犬養の援助を得て平山周と中国に渡る。犬養は、今回の金は政府とは関係ない、自由に遊んでこいと滔天らの目の前に五千元という大金を投げ出したという⁸⁵。滔天は再び犬養の厚情に感泣した。金の一部を孫・陳の両名に渡して横浜中華街に移し、自身は東京の寓居を引き払って平山と共に上海に向かった。この年、中国では戊戌の変法（政変）が起きていた。あまりに短期間に急進的な改革を進めようとした若き士大夫康有為とその高弟梁啓超らは、西太后排除のクーデタを共に画策したはずの袁世凱の裏切りと西太后の反クーデタに遭い、失脚して香港に逃れる。光緒帝は幽閉された。上海から香港に飛んだ滔天は、この清朝変法派（改革派）の康らと革命派の孫文との提携を画策したのだった。

ここに及んで滔天は、もはや当初兄彌蔵と計画していた「中国人になり切って中国に潜入して革命運動に身を投じる」という方法論からは路線変更、もっとはっきり言えばそれを捨てたといえる⁸⁶。そもそも父長蔵の教え「官の仕事に就くべからず」を忠実に守ってきた宮崎兄弟が、ある

⁸² [上村1987:157]。ついでに記せば、中国国内でも無名に近かった孫文の人となりとその思想は、『夢』が中国語に翻訳されて（というより正確には、孫文伝を中心にアレンジされた抄訳本が）中国で読まれるようになってから、広く知られるようになる。『夢』の初版（1902年8月、國光書房刊）から1年後（から2年後）に相次いで2種類の中国語訳が出された。詳しくは、『滔天全集』第1巻の島田虔次による「解題」（特に615-616ページ、『夢』の「あとがき」[宮崎1993:475,497]を参照。また、次の論稿も大いに参考になる。寇振鋒『『三十三年の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について』名古屋大学『言語文化論集』第XXXI号第1巻、49-62ページ

（<https://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/31-1/kou.pdf> 筆者閲覧2019年9月21日）

⁸³ 渡辺京二曰く、「惠州事件までの四年間」は「革命への“快楽”への陶醉の四年間」であり、「滔天の生がもっとも昂揚拡大し、ほがらかであった四年間」であった（[渡辺2006:165]）。

⁸⁴ 滔天自身が「世の卑下するところの境に身を置かんと決せり」と書いているように[宮崎1993:355]、当時の芸人は賤民視され世の憫笑を受けかねない対象であった。にもかかわらず、その覚悟を以って浪曲師になった滔天の心情について[渡辺2006:190-200]を参照。また、滔天が浪曲の「マクラ」に使っていた「落花の夢」全文は[宮崎1971:233-235]にある。

⁸⁵ 『夢』[宮崎1993:185]にある記述。平岡浩太郎が工面したものとされる。[上村1987:158]、[渡辺2006:166]も参照。

⁸⁶ このことについて滔天自身は、後年、兄彌蔵を偲んで書いた「島津彌蔵君」（『亡友録』[宮崎1971:514-519]）の中で「最も悔恨の情に堪へざらしむるものは、（中略）支那人として支那革命に従事することをなさ」なかったことだと述べている。[上村1987:25-26]も参照。また、そのことについて妻ツチに宛てた言い訳がましい手紙（明治30＝1897年6月22日付[宮崎1976:348-

うことか外務省の機密費で渡航するなどということは、おそらく彌蔵が生きていれば反対したに違いない。滔天はこれ以降、意識するとしないうちに拘らず、革命家として生きるというよりは、革命家たちおよび革命家とこれを支援する人びとの橋渡し役、仲介者、あるいは現代風にいえばファシリテーターとして活躍したといえる。これが筆者の見るところの滔天の役割の一つである。

もう一つは、言うまでもなくほとんど彼の天賦の文才によって書き残された夥しい量の滔天自身と関係者の行動記録であり、彼の心情の吐露であり、そして思想の表象であった。これらはいわば彼の革命運動関与における広報・宣伝活動、あるいは対社会関係担当（PR）と言ってよいだろう。渡辺京二は、滔天「は中国革命志士たらんとして、ついに志士援助者でしかなかった自己を発見した。それは痛烈な自覚であって、晩年の彼は自分の若き日の中国革命の夢をしばしば『誇大妄想』と呼ぶにいたっている」⁸⁷と否定的に述べる。しかし、滔天は、彼と同じような人生を歩み、実際に交遊もあった山田良政（1868-1900）のように、武装蜂起（惠州起義）に身を投じたものの（日本政府の急な支援中止に遭って）、志半ばで殉じた「援助者」とはまた異なる、しかも余人をもって代え難い重要な役割を果たしたものだといえる。以下、なるべく簡潔に、滔天が中国革命において果たした役割の重要なものを、特に孫文との関係において指摘しておきたい。

(1) 革命のファシリテーターとして

康有為との連携

康有為と孫文を提携させるという案は、滔天自身「少しくユートピア的なり」⁸⁸と後に述懐する通り、結果的には失敗する。1898年10月、紆余曲折あったが、香港発の日本郵船河内丸に乗船した康有為は、滔天らに伴われて日本に亡命する。ところが、来日したは良いが、わざわざ会いにきた孫文（および陳少白）には面会すら拒絶する⁸⁹。尤も滔天は、康の立場にも理解を示していた。懸賞金の掛かった「逆賊」たる孫文と、「孔子の再来」とまで謳われた清朝の重臣がそう簡単に手を結ぶわけにはいかない。そもそも滔天が康の日本亡命を手助けしたのは、偏に同情心からであった。一介の書生から身を起こして皇帝に上奏し、いったんは改革を実行に移した康を高く評価してもいたのである。しかし、大隈重信（外相）を説得して挙兵させろなどと言う康に対し、日本国内でもいよいよ「珍客として歓待したりし我が国の人士も、またようやくその人物に飽ききたりて、彼を疎外」する状況となり、「康君は遂に為すところなくして、欧米行の途に上るの止むを得ざるに至る」⁹⁰。犬養（および大隈）はなお康と孫の提携を画策していたが、この年11月に大隈内閣が倒れて藩閥勢力を中心とする山縣有朋内閣が成立したことも康の日本滞在を困難なものにした。対露戦略上、中国には中立の維持を望む山縣は、清朝からの康・梁らの追放要請を受け入れたのである。自発的出国を促された康らは翌1899（明治32）年3月にカナダに出国、その後はシンガポールを拠点とすることになる。

東亜同文会

350]) に関しては[上村 1987 : 122-125] および[加藤 2017 : 134-138] が詳しく解説している。

⁸⁷ [渡辺 2006:16]。[同左 168] においては、「革命家から周旋屋に転落しようとする危機」をまた滔天も当時感じていた、と述べている。

⁸⁸ 『夢』[宮崎 1993 : 196]。

⁸⁹ 『夢』[宮崎 1993 : 212-213]。戊戌の変法の経緯については[上村 1987 : 171-191]。

⁹⁰ 『夢』[宮崎 1993 : 213-214]。

話はやや前後するが、1898年の春、滔天は東亜会の結成に参画した。これは東京神田（駿河台臺政教社内）に設立されたアジア主義団体で、前年冬に開かれた福本誠（日南）の渡欧壮行会が発展的に結成に結びついたものである⁹¹。主な会員には福本、滔天の他、陸實（羯南）、三宅雪嶺、志賀重昂、池邊吉太郎（三山）、犬養毅、平岡浩太郎、安東俊明、香川悦次、江藤新作、井上雅二、平山周らがいた。その他、同年初夏（6月から7月にかけて）ロシアから帰国した内田良平も会員となった。滔天と内田が会えるのもその頃である⁹²。なお、康有為、梁啓超らも入会させている。東亜会は同年11月に同文会、興亜会（亜細亜協会）、東邦協会などを糾合して「東亜同文会」に発展的に拡大する。本部も東京赤坂溜池に構えられ、会長には近衛篤磨が就任した。

大隈・犬養が画策した康・孫提携の後押しをしたのが、この東亜会、そして発展拡大した東亜同文会であった。東亜同文会には、興亜会から合流した副島種臣、樂善堂の岸田吟香、上海東亜同文書院の初代院長となる根津一、1900（明治33）年10月の惠州起義（蜂起）で命を落とす山田良政、後に京都帝大教授となる東洋史学者の内藤湖南（虎次郎）なども名を連ねていた。東亜同文会が掲げたスローガンは「支那保全」であり、会長の近衛は「アジア・モンロー主義」⁹³を唱えていた。すなわち、欧米列強の中国蚕食（分割支配）に対抗し、日本が盟主となってアジアにおける排他的な経済圏を形成することを目指したものであった。しかし、山縣内閣が清朝からの康・梁らの追放要請を受け入れた時、近衛会長が従ったため東亜同文会内での意見は割れた。陸羯南らは脱会する。同会の変法派のみならず革命派への支援も先細りとなっていった。

そのような東亜同文会の中で、滔天や山田良政などは「過激派」と目されることとなり、1900（明治33）年9月、会を除名される。その前兆は前年1899（明治32）年4月頃より次第に明らかになっていた。滔天に対する官憲の監視が厳しくなっていたのである。滔天がマークされていたことは、外務省外交史料館に残されている警視庁から外務省宛の秘密文書（1899年6月2日付）⁹⁴によく示されている。そこには「東亜同文会は保守的な人士の集まりなのに宮崎滔天は準進歩派で、東亜同文会に頼らず支那に独力で渡ろうとし」云々とあり、その後ろ盾は「政府攻撃の材料には支那問題こそ偏強」と考える犬養で、この犬養が『甘言巧辞』を用いて人を使うのが妙で、宮崎には、再び中国の内情を調査したいのなら旅費を工面するに吝かでないなどと言っている」が、滔天が康有為を連れて帰国した後に投宿していた宿屋や待合にいくら借金があるかまで詳細に報告されている。「宮崎及ヒ平山等ハ目下貧乏如此ナル境遇ニ居ルニ拘ラズ、放蕩三昧會テ寧日ナシ」とまで書かれている。これは、滔天が実際に探偵（刑事）を宿へ上げて酒を飲ませ、そのうち一人を遊郭にまで連れて行ったからであろう⁹⁵。

布引丸事件⁹⁶

⁹¹ 『滔天全集第5巻』「年譜稿」[宮崎 1976 : 666] を参照。

⁹² 滔天は、明治31（1898）年7月（20～22日）、内田に取材し「内田甲氏 西比利亜談」を『九州日報』に連載。[宮崎 1976 : 187-192]。

⁹³ 「アジア（または東亜）モンロー主義」については、[井上寿一 2016 : 95-135] も参照。

⁹⁴ 『滔天全集第5巻』「年譜稿」[宮崎 1976 : 668-669]。以下、引用部分の現代語訳は高埜による。同秘密文書については、[上村 1987 : 198-199] も参照。

⁹⁵ このエピソードは『夢』に出てくる。「芸妓と探偵」「悪戯の反撃」「好意かえって仇となる」の箇所。[宮崎 1993 : 227-228]。

⁹⁶ 渡辺京二が「明治32年の滔天はもっぱらいわゆる『布引丸事件』にかかわってすごした」（[渡辺

滔天が官憲にマークされるに至った主たる理由は中国革命そのものというより、彼がフィリピン革命軍への武器援助に関与したからである。1898年夏に香港に渡った際、滔天はフィリピンの独立運動家たちとも知り合っていた。通説ではそれがフィリピン革命委員会の書記長マリアーノ・ポンセ（Mariano Ponce, 1863-1918）ということになっているが、その真偽は定かではない⁹⁷。しかし、ポンセはその後、比革命軍の首領アギナルド（Emilio Aguinaldo y Famy, 1869～1964年）の指示で実際に来日し、大隈・犬養をはじめとする政府要人、東亜同文会の面々、そして孫文を頼った。孫文もまたフィリピン革命には関心を示していた。滔天は孫文から、「まずフィリピン革命を成功させ、その力を借りて中国南部で蜂起するという案を打ち明け」⁹⁸られ、「君ねがわくば菲島義人のために、一臂の力を与えよ」と言われて、「余が心は熱せり」⁹⁹と昂揚する。要するに日本国内での武器調達である。滔天は犬養に相談する。犬養は——タイの植林事業の際にも滔天が一度は援助を求めた——背水將軍もしくは背山こと中村弥六に事に当たらしめては如何かと提案する。弥六は陸軍から日清戦争時の戦利品など武器弾薬を民間会社（大倉財閥の大倉組）に払い下げることに成功し、それを三井物産から買い取った中古の貨物船布引丸（積載トン数 1,441 トン）に乗せてフィリピンに向けて密かに長崎から出帆させた。1899年7月19日のことだった。

しかし、布引丸はわずか出航から1日半後の7月21日、折からの台風の暴風圏に巻き込まれ寧波の沖、馬鞍群島付近で沈没する。乗組員36名中20人弱は救助されたが、船長石川傳、武器弾薬の監督高野（長野／永野）義虎、林正文（政文）ら17名は遭難し、遂に発見されなかった。フィリピン革命への援助計画は敢えなく文字通り水泡に帰した¹⁰⁰。そして、事件はこれだけに留まらず後に滔天の人生に大きな影響を及ぼす出来事にも繋がるのであった。

興漢会結成

布引丸が沈没した時、滔天は3度目の中国行の道中にあった。広東省で蜂起に逸る動きがあると聞きつけた孫文が滔天を使節として、その「実情を視察」（より正確には同志を慰撫）させようと香港に送ったのである。しかし、直行ならば7日で着くところ、滔天が乗った仙臺丸は上海、福州、廈門、汕頭を経由して18日もかかる航路を辿った。その旅の途中（福州）、布引丸が沈んだことを知るのである。香港に着くやいなや滔天は、先に香港に到着していた陳少白と共に灣仔のフィリピン独立軍外交本部を訪れて「委員長 A・P 君」と会って布引丸の件を伝えた¹⁰¹。武器調達失敗の責任を取って自ら死を以って償うと大泣きする A・P 委員長ことアパシブル（Galicano Apacible）を滔天と陳は共に慰め励ましたのであるが、滔天は、その後、フィリピン革命からは自然と手を引くことになる¹⁰²。

2006：169])と書く通り、この事件は滔天の革命運動への関与の上で重要な意味を持つものではあるが、本稿では必要な部分以外、詳しく触れることは控えたい。

⁹⁷ 島田虔次による『『三十三年之夢』註釋』『滔天全集5巻』[宮崎 1976：612] および[上村 1987：169]を参照。

⁹⁸ [渡辺 2006：170]。

⁹⁹ 『夢』[宮崎 1993：225]。

¹⁰⁰ このことについて詳しくは、「註釋」[宮崎 1976：628]を参照。

¹⁰¹ 『夢』[宮崎 1993：231-235]、「A・P 君」については「註釋」[宮崎 1976：628]を参照。

¹⁰² フィリピン革命への武器援助に関しては、滔天や内田良平らが関与していたが、実際に渡比して義勇軍に身を投じた日本人もいた。その中には平山周の他、近藤五郎こと原禎（台湾総督府幕僚・

この時の滔天は、自身2回目の中国行（1898年夏）の際に親交を深めていた孫文率いる興中会および三合会¹⁰³という秘密結社の面々に加えて、哥老会¹⁰⁴という秘密組織とも連携することとなった。哥老会の頭目（幹部）を引き連れてきたのは湖南の畢永年であった。この畢が、平山周の前年秋からこの年の初めまでの湖南地方における調査に同行し、漢口、長沙、瀏陽、衛州など各地を回って同会の幹部と会わせ、興中会と孫文の紹介（宣伝）をしたのである¹⁰⁵。かくして1899年秋¹⁰⁶、興中会、三和会、そして哥老会の三党の頭目が一堂に会した。興中会代表としては陳少白、鄭士良、楊飛鴻、三合会からは頭目2名、そして哥老会からは最初、畢永年を含む8名が参加したが、うち1名は師襄という康有為派の唐才常の意を受けて忍び込んだ「攪乱要員」であった。滔天の機転により師襄はその場を去り、漸くにして三党合同する「忠和堂興漢会」という組織が結成された。その首領には孫文が就任した。

結成の儀式後の日本料理屋における宴席のハチャメチャな模様は『夢』の中に詳しいが¹⁰⁷、中国語も碌に話せない滔天が孫文の名代として——通訳は専ら陳少白が行った——まるで水滸伝の登場人物のような、あるいは梁山泊に集う豪傑たちを束ねてみせたことは、「滔天の風貌と個性がふさわしい役どころとして働いた」¹⁰⁸のみならず、中国の革命志士たちが滔天の義気に惚れ込み、まるで「兄弟の契り」を交わしたかの如くであった¹⁰⁹。この興漢会結成の意義は、華南に勢力を持つ三合会に続いて華中を根城とする哥老会が、変法派（保皇派）ではなく革命派側に付き、孫文の指導権が名実共に確立されたことであった¹¹⁰。しかし、現実には、「このとき新組織のもとで孫文を統領に推した会党の会員は必ずしも（中略）全組織を完全に代表するものではな」く、「この後この興漢会が組織として十分に機能した様子も見られな」¹¹¹かったし、興漢会は翌年春頃までに唐才常による金権工作でほとんど壊滅状態に追い込まれた。さらには滔天が信頼を寄せていた畢永年は絶望から革命運動から身を引き、出家してしまった¹¹²。

惠州起義（事件）

さて、孫文はフィリピン革命の失敗もあって焦っていた。そこで、興漢会が結成されて一時的に曲がりなりにも革命派の勢力が拡大した今、逸る同志を慰撫させに滔天を送り込んだにもかかわらず、布引丸に積まなかった分の武器弾薬を用いて蜂起に臨むことを企図した。かたや滔天は興漢会の結成を見た後、帰国準備中、欧米視察旅行の帰途香港に立ち寄った近衛篤磨を接遇した

陸軍大尉）や西内真鉄（砲兵軍曹）など現役・退役の軍人も含まれていた。

¹⁰³ 三合会は、1647年に福建省の少林寺で結成されたとされる秘密結社。東南アジアや在米華僑の間にも大きな影響力を持った。詳しくは、「註釋」[宮崎 1976 : 610-611] 参照。

¹⁰⁴ 哥老会は、清末に反満復明を唱えて四川で結成された秘密結社。上記三合会の影響を受けているとされる。詳しくは「註釋」[宮崎 1976 : 615] 参照。

¹⁰⁵ [上村 1987 : 258]。

¹⁰⁶ 詳しい月日は不詳。『滔天全集第5巻』「年譜稿」によれば、それは10月頃ということのようだが（[宮崎 1976 : 669-670]）、[渡辺 2006 : 172] は小野川秀美の説として11月としている。

¹⁰⁷ 『夢』[宮崎 1993 : 244-245]。

¹⁰⁸ [渡辺 2006 : 171]。

¹⁰⁹ [上村 1987 : 262-265] を参照。

¹¹⁰ [上村 1987 : 263]。

¹¹¹ [渡辺 2006 : 172]。

¹¹² [上村 1987 : 279]。畢永年については [宮崎 1993 : 422]

り、フィリピンから九死一生の難関を逃れてきた平山周と久しぶりの再会を果たすが、出発予定の前日、史堅如¹¹³と名乗る二十歳そこそこの「風姿天使を見るが如」き美青年の往訪を受けた。若くして「人類平等主義を奉じ、孫文の考えを慕い、また既に興漢会の結成まで知っていた」¹¹⁴という史は、革命運動に身を投じたいが家族（特に母親）が反対するので滔天に伴われて日本に留学することにしてほしいと頼みに来たのである。翌日訪ねてきた史の兄に事情を説明した（というより偽った）滔天は史と陳少白を伴って上海に向かった。上海に上陸した滔天は、この美青年を哥老会の幹部に託して日本に帰国した。1899年11月頃のことであった。

しかし、滔天がその容貌・人物に感嘆し画才を称えた史堅如は、翌1900（明治33）10月の惠州起義（事件）で命を落とす。そして、滔天自身もこの1件により革命のファシリテーターとして一頓挫する。人生における大きな挫折を経験するのである。この年、国際紛争に発展した義和団の乱（事変／事件／北清事変等）に乗じて孫文は華南での蜂起を企てるが、結果的にこれは失敗に終わる。その要因はいくつかあるが、その分析に入る前に、孫文の蜂起計画に加わった日本人勢の顔ぶれを見ておこう。滔天の他には平山周、清藤幸七郎、内田良平、末永節らいわゆる浪人組に、ジャーナリストとして既に名声のあった福本日南。そしてこれとは別に、フィリピン独立革命にも加わった近藤五郎こと原禎らの退役軍人グループがあった。また孫文は、平岡浩太郎の——さらには背後にあった犬養・頭山の——仲立ちによって台湾総督で陸軍大将の児玉源太郎および民政長官後藤新平との密約の上で、日本軍の介入によって福建省の厦門を占領する計画を進めていた。

この間の詳細は省略するが、10月8日に鄭士良率いる一団が惠州三州田（現在の深圳三洲田）で挙兵したものの銃弾が決定的に不足していたため、孫に急電を打ってフィリピン革命軍から譲り受けた銃弾の輸送を要請した。しかし、これが使い物にならない廃弾であった。武器調達にあたった中村背山も大倉組も、そのことを知っていて詐欺を働こうとしたらしい。この件は後に「背山事件」として告訴沙汰になり世間を賑わすことになるが、いずれにしても後の祭りである¹¹⁵。さらに10月19日に新たに成立した伊藤博文内閣が台湾総督府による厦門占領計画を中止させ、同22日、孫は革命軍の解散を命じた。これが呆気なく終わった惠州起義のあらましである。

惠州起義が失敗に終わった要因を分析し、簡単にまとめてみるならば以下のようなだろう。第一には、やはり日本（台湾総督府）の革命軍支援が中止されたことであろう。児玉総督や後藤長官は清朝打破を目指していた孫文と利害が一致していた。しかし、伊藤博文新内閣は列強の動きに神経を尖らせていた。第二は、中村背山による背信行為にほかならない。そして、第三に、上に紹介した「日本人勢」の組織、あるいは、各々の思惑、今ふうには言えば温度差の問題があった。終始、孫文の命に従ったのは滔天だけであり、他のメンバーは孫文との距離感も運動参加への熱量も徐々に変わっていった。そもそもこの惠州起義への取っ掛かりは、滔天ら一団がまずシンガポールに渡って再度、現地に居た康有為との提携を試みることから始まった。しかし、シンガポールでは康有為暗殺犯と誤解された滔天らが英政庁に逮捕・勾留され、爾後5年間の入国禁止を

¹¹³ 史堅如について詳しくは「註釋」〔宮崎 1976：631-632〕および〔宮崎 1993：428-429〕を参照。

¹¹⁴ 『夢』〔宮崎 1993：245-247〕。

¹¹⁵ 最終的には麻翁こと神鞭知常の仲裁により、中村が家産を処分して弁済することで決着する。『滔天全集第5巻』「年譜稿」〔宮崎 1976：674〕を参照。

宣告される。そしてこれが原因で香港への入境も5年間禁止となる。こうした体たらくを一番快く思わなかったのが内田良平である。1900年8月には既に「一党の心はばらばら」¹¹⁶になっていた。そこへ中村背山の件が絡み蜂起は失敗に終わったのである。

内田はことのほか中村背山を厳しく追及した。12月初めから新聞『萬朝報』には連日、背山事件の詳細が告げられたが、これを暴露したのは内田であった。翌1901（明治34）年1月15日、犬養邸で開かれた新年会の席上、内田は背山事件の責任を取れと滔天に厳しく迫り、鉢を投げつけて滔天の額を割った。怪我をさせられたことよりも満座の中で辱めを受けた滔天はすっかり意気消沈した。ともかくも「得意の4年間は終わ」り、『半生夢醒めて落花を懷ふ（思う）』ときが来た」のである¹¹⁷。

(2) 革命運動のPR担当として

滔天が担ったもう一つの役割については、まず先述の『九州日報』における「幽囚録」の連載を取り上げなければならない。上村は、連載開始にあたって滔天が書いた「読者諸君に告ぐ」と題した長文の序言に注目する。すなわち、「孫文が才識胆略共に中国稀有の人物であることを紹介すると同時に、（中略）革命勢力の侮るべからざる所以を説き、（中略）一衣帯水のわが国民が東亜の危局に対する関心をさらに振起すべきことを強調している」からである。滔天は、「今日、世界の問題は極東問題に集中している。この問題の鍵は中国の存亡にかかっている。今がまさにその存亡を決する時機である。そのような重要な機会を座して見逃すのは忍びない」¹¹⁸と熱く語るのである。滔天にとって記念すべき文章となった『幽囚録』にかけた滔天の意気込みは、「国民新聞に煙草銭代わりの雑文を書き飛ばしていたところと同日の比ではなかった」と上村は評するのである¹¹⁹。

上記(1)に紹介した1898～1901年の4年間だけでも、滔天が書き残した自らの行動記録に留まらない人物評や時事評論など数多くの論稿は、以下の通りとなる。二度目の中国行に際して書いた「支那だより」（『九州日報』に4回連載、1898年9月）、「旅中閑話」（同紙5回連載、同年9～10月）、「香港特信」（同紙2回連載、同年10月）、「支那海上より」（同紙同年10月）の他、「東京だより」（同紙に13回連載、同年11月～1899年2月）、「浮萍日程」（同紙に6回連載、同年7～9月）、「香港通信」（同紙に2回連載、同年9月）——ここまでの『九州日報』の「番外記者」としての仕事である。その後も、「独酌放言」（『二六新報』に連載、1900年10月）、「狂人譚」（『二六新報』に連載、1900年6月）、「乾坤鎔廬日抄」（同左紙に連載、1900年10月）。

そして1902（明治35）年1月30日、まさに「半生夢醒めて落花を懷ふ（思う）」との書き出しで始まる「三十三年の夢」の連載が『二六新報』に開始されるのである。浪花節語りとして全国を回ったことも滔天の革命PR活動となった。たとえば、1903（明治36）年6月22日から7月4日まで博多雄鷹座で行われた公演に際しては、以下のようなレビューが書かれた。「（前略）蓋し『三十三年の夢』の著者、南清及び非律賓の革命家として有名なる宮崎滔天虎造（ママ）の化身、牛右衛門を一見せんとて、或いは天下第一流の聞こえ高き雲右衛門を聴かんと此くは詰掛けたる

¹¹⁶ [渡辺 2006 : 180]。

¹¹⁷ [渡辺 2006 : 187]。「半生夢醒めて落花を懷ふ（思う）」とは『夢』本文の書き出し部分である。

¹¹⁸ [上村 1987 : 156]。原文は、『滔天全集』第1巻 [宮崎 1971 : 428]。現代語訳は高埜による。

¹¹⁹ [上村 1987 : 155-157]。

ものと覺へたり。(後略)」(『九州日報』明治36年6月24日)¹²⁰。滔天はついに革命運動の第一線から、いったんは身を引くのであった。

6. 現代アジア主義へのインプリケーション

さて、ここでいったん滔天とも孫文とも離れ、現代における「アジア(地域)主義」について簡単に考察して本稿を締めくくりたい。様々な見方はあるが、21世紀も第2十年期に入った現在、「アジア主義」の考察対象となるのは、本項前編で筆者が近現代日本における「第三の波」と位置付けた「東アジア地域主義(地域協力/地域統合)」と云うてよいだろう。戦後も多くの形で明治期以来のアジア主義の後継者たちが登場し、あるいは唱導、考案されてきたが、それらは、アジアを含むより広範な地域であるか(アジア・アフリカ、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ、太平洋、アジア太平洋、等々)、アジアの一部の名を冠した事実上の(de facto)貿易圏や通貨圏(華南、黄海、日本海、成長のトライアングル、パーツ、等々)を対象としてきた。そして、その多くは、それらが脚光を浴びた各々の時期と比較してみると、21世紀前半の現代においては概ね細々とその限定的な役割を果たすに留まっているか、もはや生き残っていない。今や(広義の)東アジア地域主義の中核に位置するといつてよい東南アジア諸国連合(ASEAN)が推進する一連の地域協力・地域統合の制度化(ASEAN 共同体、ASEAN 自由貿易地域=AFTA、RCEP(東アジア地域包括的経済連携、等)こそが現代における「アジア主義」の具体的な取り組みといえよう。

ASEAN 主導の東アジア協力

一方、日本も含まれる「東アジア」における協力、より具体的には「東アジア地域における平和、安定と繁栄の促進にとっての重要な協力」の枠組みとしては、ASEAN+3(日中韓)が「東アジア共同体形成において主要な役割を演ずる」とされてきた。他方で「東アジア首脳会議」(The East Asia Summit: EAS)も存在するわけだが、これにはASEAN+3に、さらに5か国(印豪NZ米露)が加わる。EASは、「東アジア地域における平和と安定、経済的繁栄を促進する目的をもって、政府首脳レベルの指導者たちが、幅広く戦略・政治・安全保障および経済の各分野において共通の利害に関わる問題について対話と協力を進める場」とであると定義される。ところが、ASEAN+3、EASのどちらも(ASEAN地域フォーラム[ARF]などとも並び)、あくまで「ASEAN統合にとって必要である、強力な域外対話諸国のパートナーシップ」の一環であり、それらASEAN主導の地域協力メカニズム間のシナジー(共働)促進の継続が重要だということが強調される¹²¹。

このこと、すなわち東アジア協力におけるASEANの「牽引者」(driving force)としての役割というものは、2005年12月の第1回EAS(マレーシア・クアラルンプール)の開催時から大きく変わってはいない¹²²。要するに、ASEAN+3にせよEASにせよ、その中心的役割を演ずるのは

¹²⁰ [宮崎 1976 : 677]。

¹²¹ See e.g., “Chairman’s Statement of the 35th ASEAN Summit, Bangkok/Nonthaburi, 3 November 2019, Advancing Partnership for Sustainability” <https://asean.org/storage/2019/11/Chairman-Statement-of-the-35th-ASEAN-Summit-FINAL.pdf>

¹²² See “Chairman’s Statement of the First East Asia Summit Kuala Lumpur, 14 December 2005” https://asean.org/?static_post=chairman-s-statement-of-the-first-east-asia-summit-kuala-lumpur-14-december-2005-2

ASEAN であって (ASEAN centrality=中心性)、ASEAN の地域協力メカニズムの論理においては、ASEAN+3 と EAS の間に上下関係はなく、むしろ相互補完的 (complementary) だということになる。ASEAN+3 は加盟国の地理的範囲からいえば実質的に東アジア協力の制度であり、一方、「東アジア」の名称を冠する EAS は、実質的には ASEAN+8 首脳会議であるといえよう。この、ある意味での「東アジア」の二重性の背景には、ASEAN+3、EAS 各々の成立過程が関係してくるのだが、長くなるので本稿では詳しく触れることはせず、そのような二重性の存在を指摘するに留めておきたい。以下では簡単に ASEAN+3 および EAS の最近の活動について紹介しておきたい。

(1) ASEAN+3 (日中韓)

EAS の発足当初、「東アジア地域は、既に ASEAN+3 の協力プロセスを通じて東アジア共同体形成実現のための努力を進展させてきた」(第 1 回 EAS 議長声明) と述べられていた¹²³。それは、1997 年にアジア経済危機が発生して以来の ASEAN 諸国と日中韓 3 国との協力体制の進展 (たとえば 2000 年のチェンマイ・イニシアティヴ等) に鑑みれば大いに理解できることである。しかし、第 2 回 EAS (2007 年 1 月 15 日、フィリピン・セブ) からは、そのニュアンスは変化し、「EAS は ASEAN+3 (および ARF やアジア太平洋経済協力 [APEC]) などと補完的な関係にあるという書かれ方になった¹²⁴。では、EAS とは相互補完的な役割を担うことになった ASEAN+3 ではどのような活動が行われているのか。本項執筆時点において直近の 2019 年 11 月に開催された ASEAN+3 第 22 回首脳会議の議長声明¹²⁵から、その内容を簡単に紹介してみよう。以下、協力項目だけを列記する。

(1)「東アジア経済共同体」の実現、(2)人身売買・サイバー犯罪・テロ対策・暴力的過激主義・麻薬取引等の非伝統的安全保障問題、(3)公正な国際貿易体制へのコミットメント (RCEP に対する支持)、(4)貿易・投資関係の強化、(5)日中韓各国にある ASEAN センターの一層の活用、(6)経済協力における民間セクターの役割、(7)エネルギー安全保障、(8)ICT の一層の活用、(9)金融協力 (チェンマイ・イニシアティヴ多国間化制度) の一層の強化、(10)マクロ経済調査事務局 (ASEAN+3 Macroeconomic Research Office: AMRO) の一層の活用、(11)アジア債券市場育成イニシアティヴ (Asian Bond Market Initiative: ABMI) ¹²⁶による各国の現地通貨建て債券市場の発展促進と市場統合、(12) (ASEAN+3 とアジア開発銀行 ADB の創設による) 信用保証・投資ファシリティ (Credit Guarantee and Investment Facility: CGIF) ¹²⁷による増資提案への各加盟国の貢献、(13)食糧・農業・林業協力 (緊急コメ備蓄協定を含む)、(14)科学技術および科技教育、(15)ASEAN 連結性 2025 年総合計画への支持、(16)国連 SDGs 到達のための持続可能な開発協力、(17)WHO との協力による非標準的および偽造薬品の撲滅および域内遠隔地・僻地に住む人びとへの安全な薬品

¹²³ 同上、第 1 回 EAS 議長声明を参照。

¹²⁴ See “Chairman’s Statement of the Second East Asia Summit Cebu, Philippines, 15 January 2007,” https://asean.org/?static_post=chairman-s-statement-of-the-second-east-asia-summit-cebu-philippines-15-january-2007

¹²⁵ “Chairman’s Statement of the 22nd ASEAN Plus Three Summit, Bangkok/Nonthaburi, 4 November 2019” <https://asean.org/storage/2019/11/APT-Chair-Statement-22nd-APT-Summit-FINAL.pdf>

¹²⁶ 2003 年に ASEAN+3 財務相会議で合意された。詳しくは、財務省ホームページを参照。
https://www.mof.go.jp/international_policy/financial_cooperation_in_asia/abmi/index.html

¹²⁷ 2011 年 11 月に設立。詳しくは、注 92 および CGIF website を参照。 <http://www.cgif-abmi.org/>

の安定的な供給システムの確立、(18)自然環境と生物多様性の保全（特に海洋プラスチック廃棄物処理¹²⁸⁾、(19)社会的弱者（貧困者、障害者、性的マイノリティ等）の人権促進と擁護、(20)域内の学生の移動の自由および学問的質の保証、(21)青少年活動と相互交流の促進、(22)人材開発と社会保障（特に環境保護主義的な職業の促進）、(23)公務員の能力向上およびガバナンスシステムに関する研究協力、(24)外交官訓練教官の研修、(25)災害管理、(26)トラック 1.5（官・産・学およびシンクタンク）による東アジア・フォーラム（East Asia Forum: EAF）¹²⁹⁾、(27)観光、エネルギー、鉱物資源、女性の活用等その他の分野、(28)ASEAN+3 ウェブサイトの創設計画、(29)地域および国際情勢。

以上のように、ASEAN+3 の扱う協力分野は極めて多岐にわたっている。但し、最後の(29)「地域および国際情勢」とは、朝鮮半島情勢に関する言及である。ASEAN+3 としても国連などと協力しつつ相応の建設的役割を果たしていくとの姿勢が示されているのだが、全体的に、いわゆる機能的協力について述べられた文書の中で、この部分はやや異彩を放つ。文書の構成上でも、他の（上記 1 から 28 の）項目とは独立した見出しが設けられている。次に紹介する EAS の議長声明の中でも（ほぼ）同様の文章が出てくるのだが、EAS の方では併せて南シナ海問題も取り上げられており、その点で違和感は小さい。朝鮮半島問題が ASEAN+3 の議長声明に入ること自体は（関係国が会議に出ているため）不自然ではないが、どうも日本が拉致問題に関する文言を入れてほしいと強く主張したのに対して、ならば米朝対話や南北対話に関して中国と韓国が果たした役割にも言及してほしいとの主張があり、いわば妥協の産物で、この 1 項が入れられたように思われる。但し、拉致問題は、「(それを含む) 人道的問題が国際社会の関心を惹いていることの重要性を何人かの政府首脳が強調した」と書かれているのみで、「日本」の国名は一言も出てこない。

(2) EAS

さて、次は EAS について紹介しよう。上記の ASEAN+3 の議長声明は 7 ページで、上に紹介した(1)から(28)の協力分野も、特にセクションごとに分けられることもなく並べられているだけだが、同時期に開かれた第 14 回 EAS の議長声明¹³⁰⁾は 9 ページあり、分量も多い上に「協力分野」が整理されており、その中にさらに細かい（ASEAN+3 の声明と同様の）記述がなされている。ここでは以下のような協力分野と項目が明記されている。

(1)環境およびエネルギー（4 項目）、(2)教育（1 項目）、(3)金融（1 項目）、(4)グローバル保健問題およびパンデミック感染症（1 項目）、(5)自然災害管理（2 項目）、(6)ASEAN 連結性への支援（2 項目）、(7)経済協力および貿易（4 項目）、(8)食糧安全保障（1 項目）、(9)海洋協力（3 項目）、(10)その他（①情報コミュニケーション技術（ICT）、②非伝統的安全保障 [越境犯罪、麻薬取引の蔓延]）、③ミャンマー・ラカイン州情勢（いわゆるロヒンギャ問題）、(11)地域および国際情勢（朝鮮半島 1 項目、南シナ海 3 項目）、(12)暴力的過激主義、先鋭化およびテロリズム（1 項目）、(13)

¹²⁸⁾ 特にこの問題については、日本の環境省ウェブサイト（<https://www.env.go.jp/press/106191.html>）、および外務省ウェブサイト（https://www.mofa.go.jp/mofaj/ic/ge/page23_002892.html）に詳しい。

¹²⁹⁾ 後述する「東アジア共同体評議会」が日本代表として参加する意見交換会。

¹³⁰⁾ See “Chairman’s Statement of the 14th East Asia Summit, Bangkok/Nonthaburi, 4 November, 2019,” https://asean.org/storage/2019/11/FINAL-Chairman-Statement-14th-EAS_CLEAN.pdf（以下、カッコ内引用部分は全て同上文書の一部である）。

持続的な地域協力体制（1項目）、(14)地域経済統合（1項目＝RCEPの基本合意について）。一方で、EASにおいては制度面でも進展が見られる。たとえば、ジャカルタでEAS大使会議を開催すること、首脳会議のフォローアップのためのEAS高級実務者会合や、ASEAN中央事務局におけるEASユニットが設置されることなどが述べられている。

上でも指摘したが、ASEAN+3議長声明の内容は、いわゆる機能的協力に関するものがほとんどを占めている。比較するとEASの方は、より政治的な色彩が強いといえる。たとえば、ASEAN国防相会議プラス（ASEAN Defense Ministers Meeting Plus: ADMM-plus¹³¹）が関与するような海洋安全保障協力や、南シナ海問題においては、（礁や砂州などの）埋め立てなど「関係国の信頼を損ない、域内の緊張を高め、平和、安全と安定を傷つけるような活動を憂慮する」とまで踏み込んだ表現を用いている。これをASEAN+3の方では取り上げないのは、やはり妥協の産物、あるいは中国に対する忖度であろうか。

いずれにせよ、ASEAN主導の「東アジア協力」は、1967年の創設以来、半世紀にわたったASEANじしんの地域協力（統合）の歩みにオーバーラップしつつ進展していく¹³²可能性はあるといっていよう。すなわち「できることをできるところから」、「急がば回れ」、「1か国でも反対があったら強行しない」といった柔軟な姿勢で実質的な（機能的）協力を積み重ねていくことによって、ASEANウェイと呼ばれるような行動様式、あるいはそれを支える「地域主義」と呼びうる信条・主張・原理あるいは共通認識、そしていわゆる我々意識のようなものが、東南アジア域内におけるのと同様に、広く「東アジア」においても醸成されていくことを期待するものである。但し、ASEAN+日中韓の13か国の間でならばまだしも、インド、オーストラリア、ニュージーランドに加えてアメリカとロシアが加盟国となった「東アジア」の首脳会議に対して、これら18か国の人びとが、どこまで——たとえ、それが経済発展のシンボルとしての名称だとしても——共通の旗印として認識できるようになるかには、少なくとも現時点では大きな疑問が残るだろう。

さて、日本でも2004年5月、「東アジア共同体」構想¹³³に関して官・産・学の連携の上で研究に取り組むシンクタンク「東アジア共同体評議会」（The Council on East Asian Community: CEAC）が設立された。本節の最後に、この組織と活動について触れておきたい。CEACは、そのウェブサイト¹³⁴の説明によれば、2003年のASEAN+3首脳会議の提案に従って設立された東アジア研究所連合（Network of East Asian Thinktanks: NEAT）と東アジア・フォーラム（East Asia Forum: EAF）に日本を代表して参加するために設立された「オール・ジャパンの知的プラットフォーム」である。しかし、同評議会は、「東アジア共同体」の研究団体ではあるが、その推進団体ではない。その活動は、NEATとEAFへの参加と併せて、研究・提言、公開討論、広報啓発の4分野からなっている。重要な活動の一つであるEAFについては、直近では2018年6月に会議（ラオス、ルア

¹³¹ または日本語では「拡大ASEAN国防相会議」と呼んでいる。「プラス」はEAS参加国の日中韓豪NZ印米露の8か国。

¹³² こうした問題意識でASEANを中核とした東アジア協力の研究に取り組んだのが、Ba [2009]の労作である。

¹³³ 日本における「東アジア共同体」論を極めてわかりやすく整理してまとめた論稿として、生田目学文「東アジア共同体論の形成と展開」[長谷川（編著）2014：261-320]を参照のこと。

¹³⁴ 「東アジア共同体評議会」のウェブサイトは、<http://www.ceac.jp/j/>

ンプラパン) が開催された模様だが、ウェブサイトには最新の報告書要旨として 2016 年 10 月の第 14 回年次総会 (カンボジア、シェムリアップ) のものが掲載されている。それを概観してみると、中長期的な「東アジア経済共同体」(an East Asia Economic Community: EAEC) への期待と展望に言及する出席者が多いように見受けられた。このことは、1990 年に当時のマレーシア首相マハティール (Mahathir bin Mohamad) が提唱し——たが、実現はおろかアメリカの反対によってトーンダウンさせざるを得なかつ——た東アジア経済協議グループ (East Asia Economic Group: EAEG) が四半世紀を経て、いよいよ実現可能性を帯びてきたことを示しているともいえよう¹³⁵。

おわりに——新たな「アジア主義」を模索して

以上、本稿では、19 世紀末から 20 世紀初頭、米西戦争が象徴するように、まさに帝国主義が隆盛を極めつつあった時代における「支那 (大陸) 浪人」の宮崎滔天と「革命家」孫文との交流を中心にアジア情勢の一端を描いてきた。本稿では滔天の生涯を全て描き切ることはできなかったが、果たして彼は、本稿冒頭に述べたような「これからの日本にこそ必要な男」なのだろうか。その行状だけを見れば、彼は、外国の政争に首を突っ込み、亡命者の手助けをし、テロリストの片棒を担ぐような危険人物だといえるかもしれない。しかし、掛け値なしに魅力的な『三十三年の夢』をはじめ「日本人の秀れた文化遺産」(竹内好) と言える数多くの文章を彼は残した。そうした意味では、ますます混沌とする現代において、時代を痛快に語る語り部としての役割を担う人材として、「必要な男」なのかもしれない。

一方、本稿がテーマとする「アジア主義」の観点から見れば、竹内好が「日本の近代化の当初においては、アジア的連帯へ向かう可能性があったかもしれないが、その可能性は早くからチェックされ、明治 30 年代、つまり日清戦争から日露戦争にかけて漸次消滅した」¹³⁶と看破したように、孫文が理想として掲げ、滔天が共鳴し自らの人生を賭けようとした方向性——四億万の蒼生を救い、亜東黄種の屈辱をすすぎ、宇内の人道を回復し擁護する——からは大きく逸脱していった。さらに言えば、孫文的な中国ひいてはアジア全域における人民の解放という目標と、本稿の最後に紹介した 21 世紀の今日における国家間協力による「地域主義」の具体的な政策実施との間には大きな隔たりが感じられるであろうし、一見、両者は到底結びつかないだろう。

すなわち両者の間には、嵌め込まれるべき重要な「パズルのピース」がいくつかある。その一つは、時代的にも思想的にも、また実態としても、アジア諸国との連帯よりも——汎アジア主義とか大東亜主義の名の下で——侵略と支配を志向するようになった日本の国際的な立場の変化があった。そしてもう一つは、第二次世界大戦後つまり日本の敗戦後、欧米列強の撤退と共に独立を果たし民族解放を実現したアジア諸国のナショナリズムがある。再び竹内好に拠るが、「戦後になって突如として」投入された「アジアのナショナリズムという新しい問題」は「過去のアジア主義と切れて、天心なり滔天なり内田なり大川なりと無関係に論じられることに、そもそも問題

¹³⁵ マハティールの EAEG (EAEC) 構想について詳しくは、金子芳樹「マレーシアにおけるアジア主義——マハティールの欧米観とアジア観」[長谷川 (編著) 2014 : 229-260] を参照。

¹³⁶ 「孫文観の問題点」[竹内 1993 : 368]

がある」¹³⁷といえるのである。だから、大変逆説的ではあるが、アジア連帯（やアジアの覚醒）を謳ったアジア主義が侵略を正当化する論理に転じて利用されたことによって、アジア諸国のナショナリズムを覚醒させ、独立戦争、平和的権限移譲、あるいは国際的監視下のいずれによるのであれ植民地・反植民地状態からの脱却を果たさせ、国家の独立と民族解放を実現させたのである——と、少なくとも一時的には信じられた。しかし、そこからまた長い葛藤の過程が始まる。挙げていけば枚挙に遑がないが、中国における大躍進や文化大革命を例に見るまでもなく、多くの国において体制選択のための戦い——政治的な戦いのみならず内戦や大量虐殺も——、大国の介入、長期独裁政権、人権侵害、人種対立等々がアジアを混乱と不安定に陥れてきた。

但し、そうした一つ一つのピースを根気よく埋め込んでいくことによって、「天心なり滔天なり内田なり大川なり」が、戦後のアジア・ナショナリズムのみならず、21世紀における東アジア地域主義とも無関係にではなく論じられるようになるのだろう。「アジア主義」はいかなる形であれ、繰り返し私たちの目の前に立ち現われてくる。よって本稿のように「旧きを訪ね新しきを知」ろうとすることも必要であろうが、もはや弱者の「抵抗の論理」としてだけではない「アジア主義」の新たな物語を紡いでいくことが、今求められているのではないか。筆者の力不足により、本稿においてはこのパズルを完成させることができなかった。今後もしばらくはこのテーマに取り組んでいくこととしたい。

最後になるが、再び個人的な想いを綴ってみたい。いささかオカルトじみているかもしれない。遥か110年前に滔天（あるいは息子の龍介）と孫文が訪れていた東京の白山神社に、そんなことをつゆほども知らなかった今から45年前の私は足を踏み入れていた。その後、約20年を経過して私は滔天の出身地熊本に職を得た。さらに約5年後、孫文が革命運動の支援を頼んだ南洋華人の末裔たる福建系華人女性と家庭を持った。ある時から、ふと私は滔天と孫文の歩んできた足跡に導かれているのではないかと強く感じるようになった¹³⁸。まさに、「げに、人生の因縁より奇なるものはあらず」¹³⁹——そんなふうに思っ、何としても本稿をまとめてみなければならないという使命感に駆られるようになった。しかし、なにぶんにも、これまでに取り組んできた戦後東南アジアにおける地域協力やそれと関連する大国間の国際政治といったテーマとは相当に異なる趣の内容となったため、稚拙な出来となった印象は自ら否めない。ただ、逆説的ながら、その東南アジア地域協力に関する研究を細々ながら積み重ねていたことが、近現代の日本におけるアジア主義への理解を深めた部分もある。本稿がその一助となれば幸いである。（2020年9月30日記す）

¹³⁷ 「日本のアジア主義」[竹内1993:351]。

¹³⁸ 他にも、ここには書けないこと、書かない方が良いこともあるのだが、思い返してみれば不思議だと思ふことが筆者のこれまでの人生には起きている。しかし、それらの奇縁を十分に生かし切れてこなかったことも、また事実であり、それは滔天なみに「顧みて自ら忸怩たらざるを得ない次第」ではある（引用は滔天「支那革命物語」の冒頭。『滔天全集』第1巻に所収。[宮崎1971:292]）。

¹³⁹ 滔天が明治30年、2回目の中国行を控えて曾根俊虎に会い、その後、曾根邸を訪ねた際に亡兄八郎の書き残した書および曾根宛ての書簡、特に、八郎もまた中国問題に関心を持っていたことがわかる内容の手紙を見たときに発した言葉である。[宮崎1993:166]。

参考文献・資料一覧（前号分も含め全て）

- 葦津珍彦（2007）『大アジア主義と頭山満』（葦津事務所）
- 飛鳥井雅道（1999）『中江兆民』（吉川弘文館）
- 井上桂子（2016）「宮崎滔天の長子宮崎龍介の中国認識——その孫文観を中心に」『国際関係研究』（日本大学国際関係学部）37 巻 1 号、27-33.
https://www.ir.nihon-u.ac.jp/pdf/research/publication/02_37-1_03.pdf（筆者閲覧 2017 年 11 月 28 日）
- 井上寿一（2016）『増補 アジア主義を問い直す』（ちくま学芸文庫）
- 色川大吉（編）（1984）『岡倉天心』（中公バックス 日本の名著 39）
- 上村希美雄（1984a）『宮崎兄弟伝 日本篇（上）』（葦書房）
- （1984b）『宮崎兄弟伝 日本篇（下）』（葦書房）
- （1987）『宮崎兄弟伝 アジア篇（上）』（葦書房）
- （1996）『宮崎兄弟伝 アジア篇（中）』（葦書房）
- （1999）『宮崎兄弟伝 アジア篇（下）』（葦書房）
- （1999）『宮崎兄弟伝 完結篇（熊本出版文化会館）』
- （2001）『龍のごとく——宮崎滔天伝』（葦書房）
- 衛藤藩吉（2003a）『衛藤藩吉著作集』第 4 巻「眠れる獅子」（東方書店）
- （2003b）『衛藤藩吉著作集』第 7 巻「日本人と中国」（東方書店）
- （2004a）『衛藤藩吉著作集』第 1 巻「近代中国政治研究」（東方書店）
- （2004b）『衛藤藩吉著作集』第 3 巻「二十世紀日中関係史」（東方書店）
- 榎本泰子（2013）『宮崎滔天——万国共通の極楽をこの世に』（ミネルヴァ書房）
- 加藤直樹（2017）『謀反の児——宮崎滔天の「世界革命」』（河出書房新社）
- 木下長宏（2005）『岡倉天心——物ニ観ズレバ竟ニ吾無シ』（ミネルヴァ書房）
- 倉山満（2013）『嘘だらけの日中近現代史』（扶桑社新書）
- 小坂文乃（2009）『革命をプロデュースした日本人——評伝 梅屋庄吉』（講談社）
- 小林よしのり（2014）『ゴーマニズム宣言 Special 大東亜論 巨傑誕生篇』（小学館）
- （2015）『ゴーマニズム宣言 Special 大東亜論 第二部 愛国志士、決起ス』（小学館）
- （2017）『ゴーマニズム宣言 Special 大東亜論 第三部 明治日本を作った男達』（小学館）
- 近藤秀樹（1984）『宮崎滔天 北一輝』（中公バックス 日本の名著 45）（中央公論社）
- 嵯峨隆（2006）「孫文の大アジア主義と日本——『大アジア主義』講演との関連で」『法学研究』（慶應義塾大学法学研究会）79 巻 4 号、27-59.
- （2015）「東亜連盟運動と中国」『法学研究』（慶應義塾大学法学研究会）88 巻 8 号、51-86.
- （2016）『アジア主義と近代日中の思想的交錯』（慶應義塾大学出版会）
- 佐藤常雄（1990）『宮崎滔天』（葦書房）
- 書肆心水（編）（2008）『アジア主義者たちの声（中）——革命評論社、あるいは中国革命への関与と蹉跌 宮崎滔天、萱野長知、北一輝』（書肆心水）
- 白石隆、ハウ・カロライン（2012）『中国は東アジアをどう変えるか——21 世紀の新地域システム』（中公新書）

- スピルマン、クリストファー・W・A (2015)『近代日本の革新論とアジア主義——北一輝、大川周明、満川亀太郎らの思想と行動』(芦書房)
- 高野澄 (1990)『伝 宮崎滔天——日中の懸橋』(徳間文庫)
- 高埜健 (2009)『『東アジア』という地域秩序——共同体構築を追求する ASEAN と東アジア首脳会議』山本信人 (編著)『東南アジアからの問いかけ』第4章所収、121-148.
- (2012)「東アジア地域主義とは何か——日本にとってのインプリケーション」『アドミニストレーション』(熊本県立大学総合管理学会) 18 卷 3・4 合併号、221-257.
- 竹内好 (1993)『日本とアジア』(ちくま学芸文庫)
- 田所竹彦 (2002)『真筆に見る日中の絆 浪人と革命家——宮崎滔天・孫文たちの日々』(里文出版)
- (2011)『孫文——百年先を見た男』(新人物文庫、新人物往来社＝初版、築地書館、2000 年)
- 立野信之 (1966)『茫々の記——宮崎滔天と孫文』(東都書房)
- 中国東北地区中日関係史研究会 (編) (編訳者 鈴木静夫、高田祥平) (1992)『中国人の見た中国・日本関係史——唐代から現代まで』(東方出版)
- 坪内隆彦 (2008)『アジア英雄伝——日本人なら知っておきたい 25 人の志士たち』(展転社)
- (2011)『維新と興亜に駆けた日本人——今こそ知っておきたい二十人の志士たち』(展転社)
- 頭山統一 (1977)『筑前玄洋社』(葦書房)
- 中島岳志 (2014)『アジア主義——その先の近代へ』(潮出版社)
- 中島誠 (2001)『アジア主義の光芒』(現代書館)
- 日本国際政治学会 (編) (2009)『国際政治』158 号「東アジア新秩序への道程」(有斐閣)
- 橋川文三 (1962)『アジア解放の夢』(記録現代史 日本の百年 第7巻) (筑摩書房)
- 長谷川雄一 (編著) (2014)『アジア主義思想と現代』(慶應義塾大学出版会)
- 坂野潤治 (2013)『近代日本とアジア——明治・思想の実像』(ちくま学芸文庫)
- 保坂正康 (2000)『反逆者たち——時代を変えた 10 人の日本人』(TBS ブリタニカ)
- (2009)『孫文の辛亥革命を助けた日本人』(ちくま文庫＝初版、『仁あり義あり、心は天下にあり——孫文の辛亥革命を助けた日本人』朝日ソノラマ、1992 年)
- 松本健一 (2000)『竹内好「日本のアジア主義」精読』(岩波現代文庫)
- 宮崎滔天 (宮崎龍介、衛藤藩吉校注) (1967)『三十三年の夢』(東洋文庫)
- (西田勝編・解説) (1967)『支那革命軍談』(法政大学出版局)
- (宮崎龍介、小野川秀美編) (1971a)『宮崎滔天全集 第1巻』(平凡社)
- (宮崎龍介、小野川秀美編) (1971b)『宮崎滔天全集 第2巻』(平凡社)
- (宮崎龍介、小野川秀美編) (1972)『宮崎滔天全集 第3巻』(平凡社)
- (宮崎龍介、小野川秀美編) (1973)『宮崎滔天全集 第4巻』(平凡社)
- (宮崎龍介、小野川秀美編) (1976)『宮崎滔天全集 第5巻』(平凡社)
- (島田虔次・近藤秀樹校注) (1993)『三十三年の夢』(岩波文庫)
- (2006a)『アジア革命奇譚集』(書肆心水)

—— (2006b) 『滔天文選——近代日本の狂と夢』 (書肆心水)

三好徹 (1983) 『革命浪人——滔天と孫文』 (中公文庫＝初版、中央公論社、1979 年)

山本博昭 (2014) 『近代を駆け抜けた男——宮崎八郎とその時代』 (書肆侃侃房)

—— (2018) 『宮崎滔天伝——人生これ一場の夢』 (書肆侃侃房)

山本吉宣、羽場久美子、押村高 (編著) (2012) 『国際政治から考える 東アジア共同体』 (ミネルヴァ書房)

夢野久作 (杉山泰道) (2015) 『近世快人伝』 (文春学藝ライブラリー)

横山宏章 (2014) 『素顔の孫文——国父になった大ぼら吹き』 (岩波書店)

劉峰 (2013) 『近代日本の「アジア主義」』 (千葉大学大学院人文社会科学部後期博士課程提出論文) mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/thesis/IBA_0019.pdf (2015 年 11 月 15 日確認)

渡辺京二 (2006) 『評伝 宮崎滔天 (新版)』 (書肆心水＝初版、大和書房、1976 年)

ASEAN (The Association of Southeast Asian Nations) Official Website -- <https://asean.org/>

Ba, Alice D. (2009), *[Re]Negotiating East and Southeast Asia: Region, Regionalism, and the Association of Southeast Asian Nations* (Stanford, CA: Stanford University Press)

Buzan, Barry and Yongjin Zhang (eds.) (2014), *Contesting International Society in East Asia* (Cambridge: Cambridge University Press).

Goh, Evelyn (2013), *The Struggle for Power: Hegemony, Hierarchy, and Transition in Post Cold-War East Asia* (Oxford: Oxford University Press).

Hotta, Eri (2007), *Pan-Asianism and Japan's War 1931-1945* (New York: Palgrave Macmillan).

Jansen, Marius B. (1954), *The Japanese and Sun Yat-Sen* (Stanford, CA: Stanford University Press)

Katzenstein, Peter and Takashi Shiraishi (eds.) (1997), *Network Power: Japan and Asia* (Ithaca and London: Cornell University Press).

Khoo, Salma Nasution (2008), *Sun Yat Sen in Penang* (Penang: Areca Books).

Mahabubani, Kishore (2008), *The New Asian Hemisphere: The Irresistible Shift of Global Power to the East* (New York: Public Affairs).

Miyakawa, Yoko (2011), "Sun Yat-sen and Japanese Pan-Asianists," in Lee Lai To and Lee Hock Guan (eds.), *Sun Yat-sen: Nanyang and the 1911 Revolution*, (Singapore: Institute of Southeast Asian Studies)

Rozman, Gilbert (ed.) (2015), *Misunderstanding Asia: International Relations Theory and Asian Studies over half a century* (New York: Palgrave Macmillan).

Saalar, Sven and J. Victor Koschmann (eds.) (2007), *Pan-Asianism in Modern Japanese History: Colonialism, regionalism, and borders* (London and New York: Routledge).

付記: 本稿の作成にあたっては、平成 26 年度熊本県立大学学長交付金(「現代アジア主義の研究」[主査・上拂耕生准教授＝当時])の一部を使わせていただいた。ここに記して感謝申し上げます。